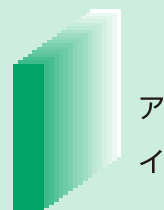




Newspaper in Education



教育に新聞を

実践報告書

2023年度



はじめに ～NIEと防災～

静岡県NIE推進協議会
会長 安倍 徹

最初に、今年1月1日に発生しました能登半島地震でお亡くなりになられた方々の御冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様にお見舞い申し上げます。一日も早い復旧・復興を願う中で、自然災害の恐ろしさを改めて痛感し、同時に日頃の防災対策の重要性を再認識しました。

そして、NIEと防災について考える機会ともなりました。8年ほど前になりますが、新聞記事で「防災力は想像力」という言葉に出会いました。静岡県の防災教育プログラムでもこの言葉が使われていましたので、皆さんも何回か出会ったことがあるのではないのでしょうか。

その記事には、①状況を設定する②何が起こるか想像する③どう行動するか想像するの3つの場面に分けて、防災力を高める対策が書かれていました。特に②については、「窓ガラスが割れるかも」「タンスが倒れてくるかも」「周辺の物が飛んでくるかも」といった「かも」の想像力を働かせることの重要性が強調されていました。このような記事をきっかけに、たくさんの「かも」をみんなで出し合い、対策を考えてみるのもNIEの一つだと思います。

新聞は今もなお被災地の様々な姿を伝えています。自らが被災者でありながら、医療活動に従事されている人、仮設住宅の建設に取り組まれている人、被災に伴う手続き業務に携わられている行政関係の人、そして、倒壊した建物の片付けや食料・洗濯・トイレの確保に奔走されているボランティアの方々などの姿を伝えています。たとえ現地に行くことはできなくても、もしその場に居合わせたら何ができるのかを想像し、被災地の方々の心情に少しでも寄り添えたらと思いを馳せることも、NIEの一つではないかと思っています。

今回の実践報告では、新聞を紙として活用する取り組みも紹介されています。実際能登半島地震の避難所でも、何枚か重ねて体に巻くことにより空気の層をつくり低体温を防止することや、筒状にしてバケツに浸け室内の湿度を高め乾燥を防ぐことにも、新聞は使われていました。非常時にも役立つ紙としての新聞の活用法を、NIEとして取り組んでみるのも有意義なことだと思います。

本報告書には、実践指定校6校の2年間にわたる工夫を凝らした実践が数多く紹介されています。皆さんの学校において教育活動を展開される上で、参考にしていただければ幸いです。

むすびに、本報告書の作成に当たり、実践指定校の教職員の方々をはじめ御協力をいただきました関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

目 次

- ◆正しく読み取り、筋道立てて考える子の育成
伊豆市立土肥小中一貫校 増田 弦己…………… 3

- ◆新たな学力につながる「新聞活用力」の育成
～日常的な取組とイベント的な取組の実践例～
静岡県富士見中学校 渡邊 貴之…………… 8

- ◆授業だけでなく、学校の教育活動全体にNIEを！
静岡市立清水飯田中学校 赤星 信太郎・池田 勇太……………14

- ◆新聞を学習から日常へ
～新聞を使って生徒の論理的思考力向上を図る～
藤枝市立広幡中学校 石橋 直明……………20

- ◆NIE教育を活用した 主体的に学び、自分の考えを表現することができる生徒の育成
浜松市立春野中学校 武井 千幸……………26

- ◆知的障害特別支援学校高等部生徒の新聞を教材として活用した授業実践
～生徒、教師が取り組んだ南の丘NIEチャレンジの報告～
静岡県立静岡北特別支援学校 南の丘分校 鈴木 雅義……………31

正しく読み取り、筋道立てて考える子の育成

伊豆市立土肥小中一貫校 増田 弦己

1. はじめに

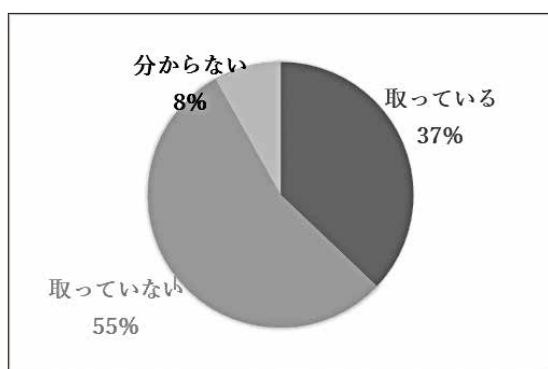
本校は、伊豆市の西側に位置し、駿河湾に面した港町にある全校111人の小規模校であり、平成30年、土肥小学校と土肥中学校がひとつになり開校した、県内初の義務教育学校である。1年生から9年生までが同じ校舎で生活を送っており、異学年交流も非常に盛んな学校である。

本校の課題として、「文章を正確に理解することが苦手な子が多い」「自分の言葉で説明することが苦手な子が多い」などが挙げられる。これらの課題解決に向けて、新聞を活用しながら取り組みを進めていくべく、「正しく読み取り、筋道立てて考える子の育成」をテーマとして掲げ、2年間の活動を行ってきた。

2. 児童生徒の実態

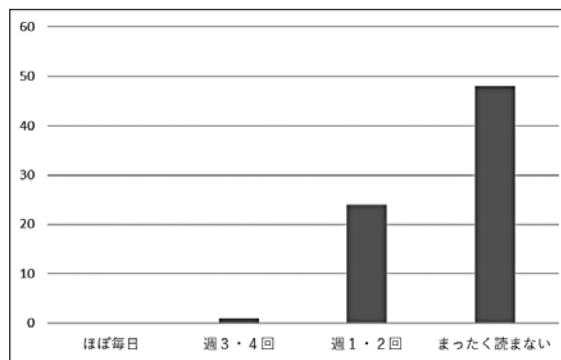
NIEの活動に取り組むにあたり、R4年度9月にアンケート調査を実施した。(5～9年 73名)

Q1：家庭で新聞を取っていますか？



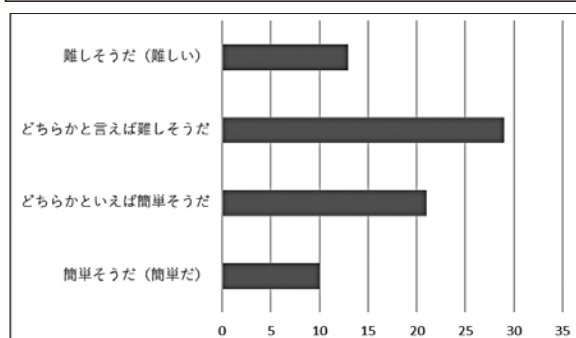
新聞を取っている家庭は半数にも満たない状況であった。中には分からないと回答する子も見られるなど、新聞への関心が決して高くはないことが感じられた。

Q2：新聞をどの程度見たり読んだりしますか？



65%以上が全く見ない・読まないを選択。週に3・4回以上新聞を手にとっていている子はほとんど見られなかった。(縦軸は人数を表す)

Q3：新聞を読むことについてどのように感じますか？



約60%の子が新聞に対して抵抗があるという結果となった。また、下の学年ほど抵抗があるという訳ではなく、学年の枠関係なく全体として抵抗感をもっていることが分かった。(横軸は人数を表す)

R4年度終了時点で、上記結果は改善傾向にあったものの、大きな変化は見られなかった。

そこでR5年度には次の2つの目標を立て、実践を行うようにした。

- ①新聞に触れることが増えたと答える子の割合50%以上(前年度比+15%)
- ②新聞を読むことに抵抗を感じる子(「難しい」「どちらかという難しい」と答える)の割合35%以下(R4年度3月時点で44%)

3. 実践内容

(1) 新聞に親しむ環境の整備

実践の対象である5～9年生のフロアに毎日の新聞を置く場所を設置した。日がたった新聞は空き教室を新聞部屋として蓄積し、いつでも持って行って良いこととした。



新聞を開き、興味のある記事を探すことはなかなか難しいと考え、「社会」「理科」などジャンルを絞り、スクラップブックを作成し、新聞部屋に設置した。昇降口にも、気になった記事を掲示し、シールを用いて自分の考えを反映できるような場とした。



(2) NIEタイムの実施



学校行事との兼ね合いから、毎週実施することはできなかったが、時期を見計らい、5～9年生は15分間のNIEタイムを日課に組み込み、新聞記事に触れる時間を確保した。この時間の実施内容は各学年の実態に沿った活動とした。以下、各学年（学年団）の活動を紹介していく。

5～7年生：新聞記事要約伝え合い活動

5～7年生は「中等部」に位置づけられ、同じフロアで生活をしており、様々な行事をともにを行っている。そのため、「中等部」という異学年

の混じったチームを作り活動した。（各学年1名ずつの3人グループ）

- (ア) 事前に新聞記事を配布しておき、子供たちは1分で記事の内容を伝えることができるようにしておく。
 - (イ) NIEタイムでは記事の内容を伝え合うことからスタート。3記事に触れさせた。
 - (ウ) それぞれの学年が読んだ記事の中心事項に関して教員が作成したクイズを出題した。
- *慣れてからは新聞記事を当日に配布し、5分で読み込み、伝えることをメモして1分の要約に臨んだ。



〈読んだ記事の内容を伝えている場面〉

はじめは、記事の内容を1分で伝えることに難しさを感じていた様子であった。記事の中心がつかめず、到底1分で伝えることができなかった。1分で伝えることができて、記事の中心ではないことを話すこともあり、その場合はチームのメンバーがクイズに答えることが難しくなる。チーム内からは「こんなこと一言も説明されていないよ…」「今回はばっちり伝えていた」「あれ？こんなこと言っていたっけ？」という声が聞かれた。しかし、回数を重ねるにつれ、自分の発表が終わると「よし！今回は完璧だ」と漏らす子もいるなど、段々要約が上達してきたように思う。要約がしっかりできてできなくても最後はクイズで締めくくるため、楽しい雰囲気でも活動を終えることができた。

8年生：静岡新聞のワークシートを活用した読み取り

8年生では、静岡新聞のワークシートを活用し、問題に取り組んだ。熱心に問題に取り組むだ

けでなく、新聞記事に関する雑談や子供たちの感想を聞くなど、堅苦しくない時間になるよう心がけて活動に取り組んだ。

9年生：新聞を活用したクイズ大会

9年生では、ペアを組み、それぞれが違った記事を読み、お互いにクイズを作成し、問題を出し合う活動を行った。記事を読み、驚いたことなどをクイズに出題することから、感じた驚きを共有し、盛り上がりながら活動を行うことができた。

昨年度実施したNIEタイムの内容

5・6年：「記事を読んだ感想の打ち込み」

記事を読み、ロイロノートで作成したX(旧Twitter)に見立てたノートに感想を打ち込む

7年：「失われた見出しを取り戻そう」

記事の見出しを考える+感想を書く

8年：「クイズ大会」

9年：「それぞれ違う記事を読み要約⇒伝え合い」

NIEタイムの感想

- ・ニュースでは分からなかったことが文字で読み返してみると分かった。
- ・国語の文章問題が得意になりそう。
- ・新聞を読む機会が週に一回ほどあると、知らなかったことが知れたり、自分が思ったことなどをまとめるのが前まで苦手でしたが、SNSのような感じで感想を入れるのはとても楽しかったです。今まで新聞は難しいと思っていましたが、新聞を読む機会が増えると、言葉の意味などを理解する力がついてきたので難しく感じなくなってきました。

新聞の良さに言及したり、今までの新聞に対するイメージを変えていたりする感想が多々見られた。

一方で、「休み時間が10分しかなく、次の授業の準備、委員会の仕事、係の仕事、予定を書くなどやる事が多く、新聞を集中して読むのは難しい。イベントや新聞の授業をつくらないと難しいと思う」という記述など、意図して新聞に触れる時間を設けるべきだという記述もあった。休み時間にゆっくり新聞に親しむことのできる時間の確保が課題として挙げられた。

(3) シンブリオバトルの開催（5～9年生）



ここ数年、本校の課題として挙げられてきたのが表現力である。過去には月に1回程度「スピーチ集会」を開催していたが、なかなか思うような成果は上げられなかった。そこで新聞を用いたスピーチ大会を開催してみることにした。

1回目は「聞いている人がその記事を読みたくくなるようなスピーチ」、2回目は「新聞を読んで感じたメッセージを伝えるスピーチ」など、テーマを決めて実施した。各クラスで予選会を開き、クラス代表2名ずつ(計10名)が本戦に出場し、5～9年生を前にスピーチを行ったが、このスピーチ大会は、思いのほか盛り上がる結果となった。本戦に出場する子供は、演台から離れ、聞き手に訴えかけるなど、思い思いの表現活動に取り組んだ。中には、後期課程に混じり、前期課程(5・6年生)の子が表彰されることもあった。

予選会の前には、新聞を保管している教室に足を運び、様々な記事を見比べながら発表に使う記事を選ぶ姿があった。読んで終わりにとどまらない活動であり、様々な記事にじっくり目を通す機会になったのではないかと考える。

子供たちからは「次回はいつやるんですか?」といった発言もでてきたことは成果であり、従来実施していたスピーチ集会にはない姿であった。

また、朝の会や帰りの会には新聞を用いたスピーチを年間継続して行う学年もあり、1年間を通してスピーチに新聞を活用することで様々な情報を得ることができたのではないかと考える。



(4) 年間を通した条件作文 (5・6年生)

5・6年生では、毎週末の課題として新聞記事を用いた条件作文を実施した。やり方としては、ノートの右側に教員が選んだ新聞記事を貼り、ノートの左側に「記事を読んで分かったこと(記事の中心から)」「記事を読んで思ったこと、考えたこと」の2段落構成で作文を書くというものである。はじめは記事の中心を捉えることができず、書いている内容が一人一人ばらばらなことが多かったが、回数を重ねるごとに要点がつかめるようになり、記事の中心に対する自分の考えを書くことができるようになっていった。記事には、その時々にあった話題や、学習内容と関係のあるものを選ぶことで、抵抗感なく取り組むことができたのではないかと考える。毎週継続することで、子供たちは新聞記事を読むことが当たり前になってきたのではないかと推測される。ただ、今回は、教員が記事を選び、配布するといった形式であったが、回数を重ねた後は子供たち自身が記事を選ぶこともできたのではないかと考える。



〈子供が提出したノート〉

(5) 授業での実践

① M 1 グランプリ

5年生では社会、6年生では国語の授業冒頭に見出しを隠した新聞記事を提示し、それぞれが見出しを作成して、誰の見出しが一番読みたくなるかを競い合う「M 1 (見出しワン) グランプリ」を開催した。

この活動は授業冒頭5分程度で完結するため、負担も少なく、子供たちからは人気の企画となった。見出しは15文字程度で作る約束を設けたが、ただ見出しを付けるだけでなく、お互いの考えを競い合うことで、15文字の中により引きつける言葉を入れていこうという工夫が感じられるよう

になっていった。提示する新聞記事も学習内容に関係するものや、季節にまつわるものを選び、授業内でも活用できるようにした。

夕日ストライク!! 空は茜色に!

〈子供が作成した見出し〉

② 5年生 社会 「食料生産」

ロシアのウクライナ侵攻に端を発した食料品の値上げは、連日ニュースに取り上げられてきた。また、今年は暑さの影響や、原子力発電所の処理水による中国の輸入規制など、食料生産の分野で変化の多い1年であった。そのため、5年生社会「私たちの生活と食料生産」の單元では、新聞の活用が効果的であった。

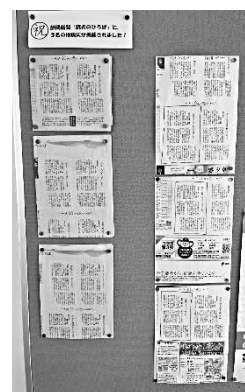
どうしても教科書や資料集だけの情報だと、掲載されている年代も数年前ということで「今」を捉えることができない。

新聞記事を用いることで、日本の「今」が映され、子供たちの中で問題意識も生まれやすい。授業冒頭、深める場面、終末の次時へ繋げる場面、様々な場面で新聞記事の活用を試みたが、どれも子どもたちは一生懸命目を通し、「そうだったのか」「これは知らなかった」と漏らすなど、記事からタイムリーな新たな学びを得ていたようだった。

社会科における新聞記事活用の効果を大いに感じた2年間であった。学習内容と直接関わりが無くても提示すると子供たちは、興味をもって読み進めた。「自分事」として捉えるには今の社会の状況を映し出す必要があることが感じられた。

③ 後期課程 国語 投書

後期課程(中学1年~中学3年)の生徒は、静岡新聞「ひろば10代」への投稿に挑戦した。自分たちの思いを広く発信する活動は生徒にとって身近ではないため、はじめは戸惑う姿も見られたが、一度仲間の手



文が新聞に掲載されると、その後は熱が入ったように作文に取り組む姿があった。クラスの仲間が新聞に掲載されることで、より新聞が身近になった印象がある。結果、本校からは5名の生徒が新聞に掲載された。

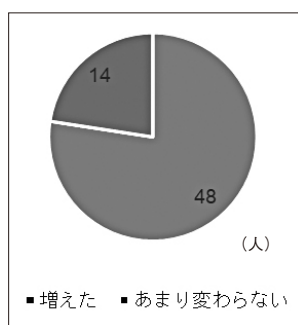
4. 成果と課題

(成果)

○2年間を通して新聞への抵抗感を和らげることができた

アンケート結果より

Q 1：この1年で新聞を読む機会は増えましたか？



8割近い子がこの1年で新聞を読む機会が増えたと回答した。新聞に触れる機会を増やすことができたことは成果であろう。ただ、この質問では自発的に見るようになったのか

は不透明である。提示されたものだけを見るのではなく、自分で新聞を開いてみる子の割合は、気になるところである。

Q 2：新聞を読むことについてどのように感じますか？

		R4年度 3月	R5年度 12月	
新聞を読むことについてどのように感じますか？	簡単	18%	19%	+1
	どちらかといえば簡単	38%	54%	+16
	どちらかといえば難しい	33%	22%	-11
	難しい	11%	5%	-6

新聞に抵抗を感じる子（どちらかといえば難しい・難しいと回答）の割合はR5年度当初にたてた目標を達成し、昨年度から日を増すごとに減少していった。

○新聞活用という「引き出し」が増えた。

正直、授業に新聞を取り入れることはない教員も多かった。しかしながら毎日数紙新聞が届くことから教員も新聞を目にするようになり、必要に応じて授業に取り入れてきた。思いのほか使い勝手が良かったと感じる人もおり、「引き出し」が増えたのではないだろうか。

(課題)

●新聞の日常化には至らなかった

アンケートの結果からは新聞に触れる機会が増えたと答える子が多かったが、新聞を読む(見ることが日常的になっていた訳ではない。実際、廊下に置いた新聞を開き、目を通す子は数名に限られていた印象である。実際、調べ学習の際に進んで新聞から情報を採ろうとした子は非常に少なかった。

●使われている言葉が難しく、正しい読み取りができていたのか不明瞭



上の板書は、ある子が記事を読んでいて分からなかった言葉を書き上げていったものである。「原因」など、日常よく使う言葉も、実はこの子にとってみれば難しかったのである。新聞は義務教育修了時の学習能力で理解できるように作られている。この子にとってみれば難しかったと気づけたことは良かったのだが、こういった子に新聞記事を提示し続けてきたが、いったいどれだけ理解できたかは定かではない。特に新聞にはその分野の専門用語も載っていることが多かったため、より細かな説明が必要であったと反省している。

新たな学力につながる「新聞活用力」の育成

～日常的な取組とイベント的な取組の実践例～

静岡県富士見中学校 渡邊 貴之

1. はじめに

(1) 学校紹介

本校は富士市にあり、昭和2年に静岡県富士見女学校として創立し、昭和23年に静岡県富士見高等学校となり、平成6年には男女共学になり現在に至る。令和8年に創立100周年を迎える私立学校である。全校生徒1,000名を超える高校には、国公立と難関私大への進学を目指す特進コースと、4年制大学、短大、専門学校、就職のいずれにも対応する総合コースがある。

本中学校は、平成26年に静岡県富士見中学校として創立し、9年目を迎えた。現在1年16名、2年16名、3年7名の合計39名が在籍し、内進生として特進コースへ進学し、国公立・難関私大への進学を目指すことになる。本中学校で身に付けた力を発揮し、特進コースを牽引する存在として活躍することを期待している。

(2) 本校のNIE実践目標

新学習指導要領に示された新たな学力の3つの観点である「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」の育成につながる力（「新聞活用力」という）を身に付けさせることを目標にNIEに取り組んできた。

本校が目指す3つの「新聞活用力」

- ①長文を読解し要約する力。
- ②根拠を持って自分の意見を表現する力。
- ③幅広い分野の情報に興味・関心を持ち、主体的に学習を発展させていく力。

上記の3つの力を身に付けるために実践してきた8つの取り組みは、以下の通りである。

2. 実践内容

(1) 身近に感じる「新聞コーナー」

本校には中学生、高校生が共に利用できる図書館があり、毎日の新聞もファイルされているが、NIEの指定を受けたことをきっかけに、中学校校舎の教室前の廊下に「新聞コーナー」を設置した。「新聞コーナー」の管理は、図書委員会が担当し、毎日届けられる新聞は、「新聞コーナー」に配置した。新聞ウィーク期間以外にも、貸出ができるように名簿を活用している。



(2) 習慣付けの始まり「新聞ウィーク」

本校では8:10から8:30まで「朝読書」の時間がある。その時間帯で、毎月1週間の「新聞ウィーク」を設定した。期間中、生徒は新聞コーナーから、当日またはバックナンバーの新聞を自分で選んで読み、現在、本校の生徒の家では、新聞を購読していない



家庭が全体の62%と多いが、「新聞ウィーク」をきっかけに、登校するとすぐに新聞を借りて教室で読んでいる生徒の姿が見られるようになった。

(3) 「委員会新聞」づくりとプレゼン発表

本中学校には、生徒会の中心となるF委員会の他、生活・図書・体育・文化・厚生・保健・選挙管理・広報の8つの専門委員会がある。「新聞活用教室」の時間を使って、中学1年・2年・3年の「縦割り活動」で、所属する「委員会の視点からの新聞記事」を選び、記事の概要の説明と意見や感想をまとめたものを「委員会新聞」として作成した。



本中学校では「全員読書会」や「ビブリオバトル」、総合的な学習の成果をプレゼンソフトでスライドを作成し「プレゼン発表」を行う場がある。そこで、「委員会新聞」を掲示するだけでなく、委員会ごとにプレゼン発表する場を設けることにした。日頃は、委員会の仕事を当番で経験するだけであるが、今回の「委員会新聞」づくりによって、自分が所属する委員会について、その活動の意義を理解したり、深めたりする機会になった。

(4) 5の付く日の課題「新聞ノート」(社会科)

中学2年生の社会科では、毎月5の数字が付く日(5日、15日、25日)に「新聞ノート」と名付けたプリントを配布し、10日間の内に、自分で選んだ新聞記事を読んで、記事の内容を200字程度にまとめたり、感想や意見を200字程度にまとめたりする学習に取り組んだ。新聞記事は自分で自由に選んで良いが、社会科の歴史や地理の授業で学習したことや、3年生になって学習する政治や経済に関すること、世界情勢や国際社会に関することなどにもチャレンジするように指導している。定期テストにおいても、「新聞記事」を掲載し、いくつかの問いを設定し出題している。これらの取り組みによって、少しずつではあるが、概要の説明や感想、意見を複数行に渡って記述できるようになってきた。



(5) 静岡新聞ワークシートを使った授業(国語科)

毎週金曜日の国語の時間に、「静岡新聞ワークシート」や、教科担任が新聞記事を選んで自作したワークシートを活用する活動を継続して行った。目標として、①記事を正しく読み取り、語彙を増やすこと。②今起きていること、特に地域のニュースに関心を向け、自分の意見を持つことに重点を置いた。取り組み例を紹介する。



富士宮市で開催された「陣馬の滝まつり」(静岡新聞、令和5年8月20日付)の記事を読んで、記者になったつもりで、「小見出し」を考え発表し合う授業である。何を伝えたいかにより、「見出し」が変化する面白さを味わい、お互いに評価し合った。

この学習を踏まえて、教科担任が選んだ新聞記事「静岡で開催された大道芸W杯」(静岡新聞、令和5年11月6日付)では、個人で考えたタイトル(大見出し)を評価し合う授業を行った。個人の考えたタイトル(大見出し)に込めた思いを



グループになって発表し合った。学習を通して、何を読者に一番伝えたいかにより、見出しも内容も変わることが分かった。実際に新聞に使われたタイトル(大見出し)と同じタイトルを付けた生徒もいて、視点の鋭さに驚く場面もあった。この活動を継続していくことで、「長文を深く読み解く力」を育成すると同時に、「書き手と読み手という立場を意識して書く力」を育成することができると思う。

(6) Japan news を使った授業 (英語科)

英語の授業の Warming up で、「Japan news」(英字新聞)を読み、興味のある記事について紹介し合う活動を行った。

〈授業展開〉

- (1) 「火災現場」の写真から記事の内容を想像させる。
- (2) 英字新聞の記事を読んで、個人で内容をつかむように取り組む。(※ここまで英和辞書の使用無し)
- (3) 意味の分からない英単語を上げ、フラッシュカードで発音と意味を確認する。
- (4) 記事の大まかな内容をつかめたことを確認する。
- (5) ワークシートを使って、質問に答えさせて理解を深めていく。
- (6) 日本における「自然災害と対策」について、自分の意見を発表させる。



新聞は写真やタイトルからでも、記事の内容が想像できることを感じ取らせたいと考え、次のような授業を構想し実施した。扱った記事は、「Let's えいGO! 今週の英語 News」の記事「ハワイで最悪の自然災害」(静岡新聞、令和5年9月3日付)である。

このような授業を継続することで、生徒にとって、英字新聞がより身近な存在になっていくことを期待する。



(7) 静岡新聞記者招聘講習

NIEに取り組むことで身に付いた力が、学習に生かされることが大切である。そのためには、新聞記事を読むだけでなく、取材時に必要な「質問する力」と、「メモする力」を身に付ける必要がある。この力は、机上で学ぶ時はもとより、実際に講義や講習を受ける際にも大いに役立つ力である。そこで、静岡新聞社のNIE事務局で新聞記者経験もある倉垣内将賢氏に講義を依頼した。講義の内容は、取材の際の心構えやその方法、メモの取り方についてである。また、ペアを作っていく

つかの実践練習を行い、互いに相手の持つ情報の聞き出し方を体験した。このような情報の聞き出し方は、今求められているコミュニケーション力につながるものであり、教科指導においても高めていきたい力と考えている。



(8) 「記者会見」と「ニュースキャスター」を体験する新聞活用教室

3学年全員で行った、新聞記事「空飛ぶクルマ先進地に」（静岡新聞、令和5年9月18日付）の記事を扱った授業を紹介する。

〈事前準備〉

- (1) 新聞記事を読み、ワークシートに取り組む。
- (2) 教師が考えた問い（6問）に答える。
- (3) 自分で考えた問い（4問）を作成する。

〈授業展開〉

- (1) 2人組を作る。第1ラウンドは、「企業」側の立場で、新聞記事の概要を伝える。（3分）
- (2) それを聞いた「記者」側が質問し、「企業」側が答える。（7分）
*時間内で繰り返す
- (3) 第2ラウンドは、「企業」側と「記者」側の立場を入れ替えて行う。
- (4) ニュースキャスターの立場で、新聞記事の内容を意見や感想を含めて説明する。（5分）
- (5) 新聞記事に関連した「空飛ぶクルマ」のテレビニュースを視聴する。
- (6) テレビニュースの音声を消した映像に合わせて、ニュースキャスターになりきって報道する。

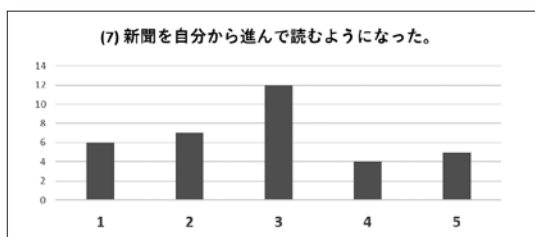
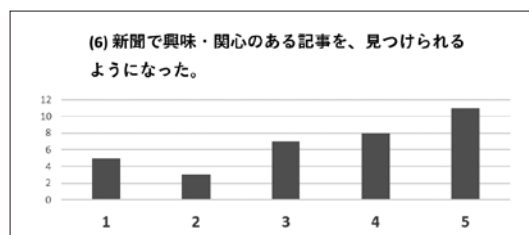
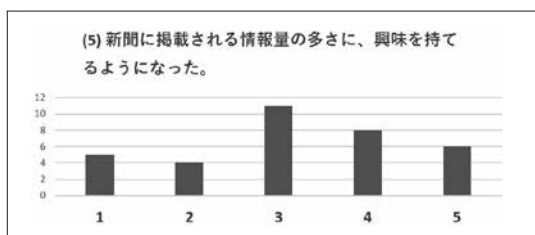
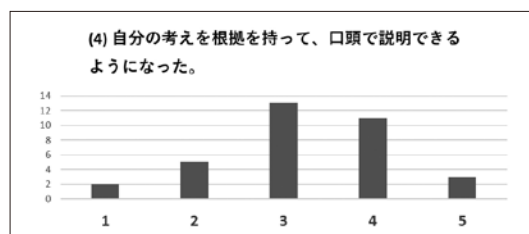
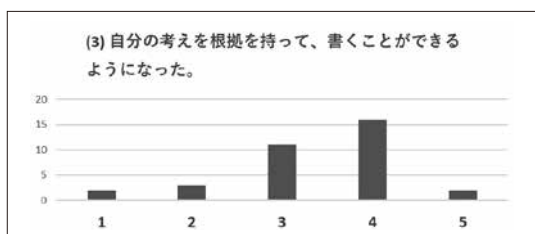
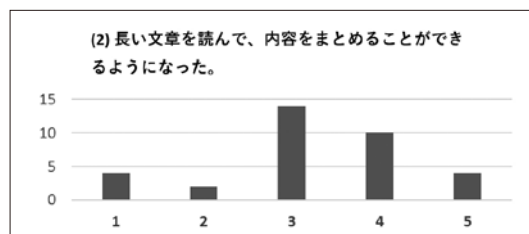
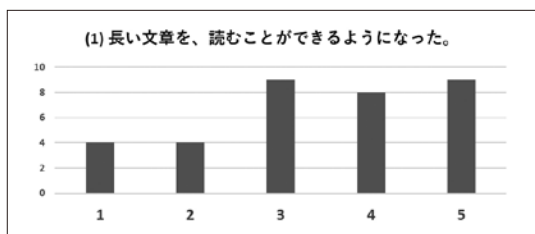


生徒には事前に、「記者会見」会場を想定し、新聞記者と記者会見に応じる企業の両方の立場と、さらに「記者会見」の様子を報道するニュースキャスターの立場の3役を経験することが、本時の狙いであることを説明した。

音声を消した映像に合わせてニュースキャスターにチャレンジする場面では、多くの生徒が希望した。代表発表者となった生徒は、大変上手に映像に合わせて新聞記事を説明することができた。その姿は、「新聞活用力」を育成していく上で、目指す生徒の姿を共有する機会になった。

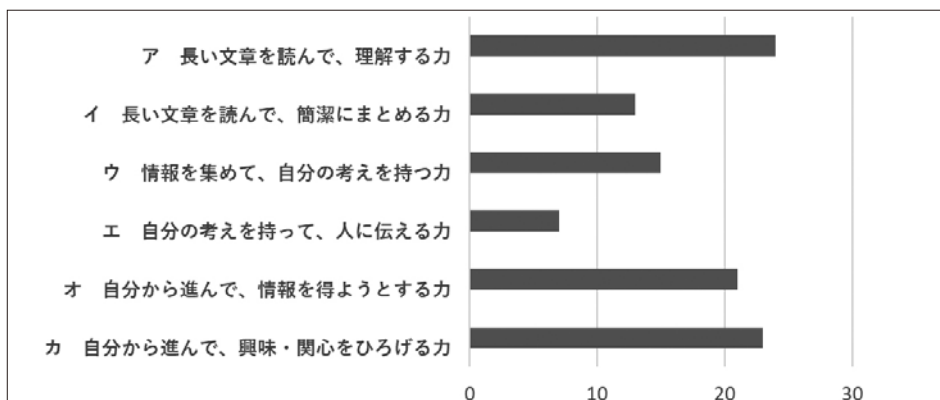
3. アンケート結果

問① 新聞を読んで効果があったと思うことは、どんなことですか？



- 1. 思わない
- 2. あまり思わない
- 3. どちらとも言えない
- 4. 少し思う
- 5. とても思う

問② 新聞を読むと、どんな力が付くと思いますか？



4. 成果

- 毎朝届く新聞は、図書委員会が当番制で、「新聞コーナー」に並べる。また、「新聞ウィーク」には、図書委員が呼びかけて新聞読みが始まる。委員会活動の1つになったことで、生徒にとって新聞が身近なものに感じられるようになった。
- 「委員会新聞」づくりでは、所属する委員会の視点で新聞記事を読み、活動の一端が日本や世界とつながっている実感を持つことができた。
- 「新聞ノート」の取り組みを通じて、長文の読解力や記述の説明が上手になった生徒が多くみられた。キーワードを押さえて説明する問題は定期テストでも出題しているが、少しずつではあるが、記述による解答の質が向上してきている。
- 国語、英語の授業では、「静岡新聞ワークシート」を活用することで、短時間で新聞記事の内容を読み取り、記事に対する自分の考えを書けるようになった。
- 国語科では毎週金曜日を「新聞を読む日」に設定し、社会科では5、15、25日を「新聞ノートの日」に設定した。学校で取り組むのに、回数的には月3～4回新聞を読む機会をつくるのが適度だと考えた。
- 「新聞活用教室」は、新聞記事の内容を知るだけでなく、内容を伝えたり、聞いたことをメモして質問したりすることの大切さを学べた。さらに、学習におけるコミュニケーション力を育成する機会になった。

5. 課題

- 次年度はN I E実践指定校ではなくなるが、いずれの活動も継続していきたいと考える。そのために必要となるのは、複数の新聞をどのようにして集めるかである。現在、生徒と職員に自宅で購読している新聞を提供してもらうことを考えている。

6. 今後の取組

- 国語と社会科の取組については継続していく。加えて、授業の教材としての活用を増やしていこうと考えている。
- 年間活動計画の中で、年1～2回の「新聞活用教室」を設定して、今回実施した「記者会見」とニュースキャスターを想定した学習を実施したいと考えている。

授業だけでなく、学校の教育活動全体にNIEを！

静岡市立清水飯田中学校 赤星 信太朗・池田 勇太

1. はじめに

本校は静岡市清水区に位置し、古くからある住宅街と近年になって住宅が立ち並ぶ新興住宅地の両方を有する学区である。各学年4～5学級、特別支援学級が3学級の計17学級であり、全校生徒は約460名という中規模校である。本校がNIE実践校として指定を受けるまで、新聞を読んだり見たりする環境が身近にない生徒が多いように感じたため、筆者の所属学年である本校2年生を対象に、まずは新聞に関する生徒の実態把握を行った（2023年4月10日、n=143）。

【質問1】あなたは新聞が好きですか？		【質問2】あなたは新聞をどのくらい読みますか？	
はい	3.5%	ほぼ毎日読む	2.1%
どちらかといえば、はい	19.6%	週に3～4日読む	0%
どちらかといえば、いいえ	36.4%	週に1～2日読む	16.8%
いいえ	40.5%	まったく読まない	81.1%

【質問3】あなたは新聞に対して、どのようなイメージをもっていますか？（筆者抜粋）

- ・色々な情報が載っている
- ・ニュースをいち早く伝えるもの
- ・世界の情報を知れる
- ・たくさんのことを知れる紙
- ・表現の自由
- ・何度も読み返せる
- ・雰囲気が好き
- ・文字が多い
- ・文字だらけ
- ・難しそう
- ・見にくいイメージ
- ・読むのが疲れる
- ・おじいさん、おばあさんが読んでいるイメージ
- ・大人の人や、年配の方が見ている

以上の質問紙調査から、本校2年生は新聞に対して肯定的なイメージをもっている生徒は少なく、新聞をまったく読まない生徒が8割を超えていることが分かった。また、新聞のイメージとして様々な情報を早く手に入れたり、繰り返し読むことが可能であるというイメージを持つ生徒がいる一方で、漢字が多く小さい文字が並んでいることで見にくさを感じたり、若者があまり読まないイメージを持ったりする生徒がいることが判明した。

新聞には「網羅性」「一覧性」「伝達性」「信頼性」「速報性」「再読性」など様々な特徴があり、予測困難な社会を生き抜く子どもたちにとって必要な社会の情報を素早く正確に手に入れることができる効果がある。そこで、NIEを通して新聞に親しみ、新聞を身近に感じてもらう生徒を育成するため、授業をはじめ様々な場面で新聞活用を試みることにした。また、これらの実態に加え、本校は学区の特性上、多様な背景をもつ生徒が多く、学力差の大きい学年の生徒集団であることも踏まえ、「学校の教育活動のあらゆる場面でNIEを活用して学校をより良くしたい」という思いを抱き、NIEを学校改善・学年改善に繋げていきたいという願いをもって実践にあたった。

2. 実践内容

（1）授業実践としての取り組み

NIE担当教員の専門教科である国語科・社会科を中心に、新聞記事を用いた授業実践を行った。1、2年生は国語科を中心に新聞を読み取る活動を中心に授業を展開し、3年生は社会科の公民的分野を中心に社会問題に関わる授業実践を行った。（紙面の都合上、抜粋して紹介）

① 2年生 国語科「論説文—構成を工夫して『読者のひろば』へ思いを伝えよう！（5時間）」

静岡新聞の投稿文「読者のひろば 10代の思い」へ、社会を取り巻く問題について考えた論説文を書くという目的で取り組んだ。導入部では、問題意識について考えるために、様々な問題について考えた「10代の思い」の投稿文を読みながら、説明の工夫について気付いたり、自身の興味に沿ったテーマを選択したりした。また、「根拠の適切さ」を考えるために、インターネットなどを用いて情報収集を行いながら、客観性が保証された文章を目指した。文章を推敲するときはJamboardなどを利用し、子ども同士が文章を確認しやすくする配慮を行った。お互いの文章をよりよいものにすることはもちろん、学年で取り組んでいた「読者のひろば」の投稿文を子ども同士で読み合うことは初めてだったため、関心をもって取り組むことができた。

② 3年生 社会科「基本的人権のまとめ（1時間）」

生徒一人一人に新聞を配布し、授業で既習した基本的人権に関する記事を探す授業を行った。記事の内容を、「いつ」「どこで」「どのようなことが」などを中心にレポートに記入し、日本国憲法の条文と照らし合わせて基本的人権のどの人権と関係が深いのかを考えさせた。

③ 3年生 社会科「地方自治（9時間）」

静岡新聞の記事を使ったワークシートを活用し、地域の課題を把握する時間を設定した。その後、「把握した課題を解決するためにできることは何か」という単元を貫く問いを設定した。また、ワークシートには新聞記事やグラフ・表などの資料も記載されているため、資料活用の技能の向上にも役立った。

④ 特別支援学級（知的） 社会科「都道府県調べ（2時間）」

新聞広告を使つての産地調べを行った。生徒たちは産地を調べる中で、それぞれの地域の特色を活かした農作物が作られていることをつかむことができた。また、観光地や名物などを調べた授業を行った後に、新聞を配布し既習した都道府県が書かれている箇所にも色をつけた。見つけた都道府県を白地図に着色し、都道府県の名称と位置を合致させる授業を行った。新聞記事を活用することで、地域の社会的事象を学ぶツールとして効果的であった。

⑤ 道徳科「上げ馬神事を続けるべきか？」

三重県の多度大社で約700年前から続いている伝統行事「上げ馬神事」において、馬への負担が大きいのではないかという動物虐待の問題が取りざたされているという新聞記事を紹介し、「伝統と文化の尊重」と「生命の尊さ」について考え、議論を重ねた。生徒たちは、この授業を通して伝統文化も時代に合わせて形を変えていくことの重要性を考えることができた。

(2) 学校全体としての取り組み

① 新聞コーナーの設置

令和4年度、令和5年度ともに校内に新聞コーナーを設置した。令和4年度は全7社の新聞を置いた新聞コーナーを正面玄関に設置し、全校生徒が新聞を読む機会を得られるように配慮した。また、新聞記事の内容に関するクイズも同時に設置し、生徒が関心をもって新聞記事を読み進められるようにした。

初年次（令和4年度）はそれぞれの新聞記事を比較しながら読む目的で複数の新聞を採用したが、選択肢が多すぎて逆効果であると判断したため、2年次（令和5年度）は一度に置く新聞を2社～3社に絞り、より内容の比較がしやすいように配慮した。そして、新聞コーナーを正面玄関に加え2年生の学年廊下にも設置して、NIEを推進する教員のいる学年の生徒がより手に取りやすい工夫を行った。その結果、両方の新聞コーナーで多くの生徒が休み時間等に新聞を手に取り、読む姿が見られた。



② 昼の放送による記事紹介

放送委員会を中心に、昼の放送でその日の新聞記事の紹介を行った。特に3年生にとっては、高校入試前での取り組みとして、時事関係のニュースについて知ることができ、高校入試の面接対策に効果的であった。

③ 新聞を活用した進路学習

進路学習において、高等学校等から出されている資料やインターネットだけではなく、新聞からの情報も含めて進路設計を行う機会を設定した。生徒たちからボランティアを募り、高校に関係する記事を集めて3年生の多目的ホールに掲示した。現在、各高校でどのような取り組みが行われているか知ることができ、自身の将来の展望に応じた志望動機を考えるきっかけとなった。

(3) 学年部としての取り組み

令和5年度においては、NIEを推進する担当教員2名が2年部所属ということもあり、学年部を中心にしてNIE活動を展開した。

① 静岡新聞「ひろば10代」への投稿（通年）

朝学習などの時間を利用して、静岡新聞の「ひろば10代」へ作文を投稿した（通年で全6回）。テーマを自由にした回もあれば、「1年を振り返って」「親への思い」などテーマを決めて作文を書いた回もあり、年間を通して18名（延べ20回）の生徒が採用された。この活動を通して、生徒たちは意欲的に自身の思いを書くことができた。



② 新聞紙を使った清掃活動（通年）

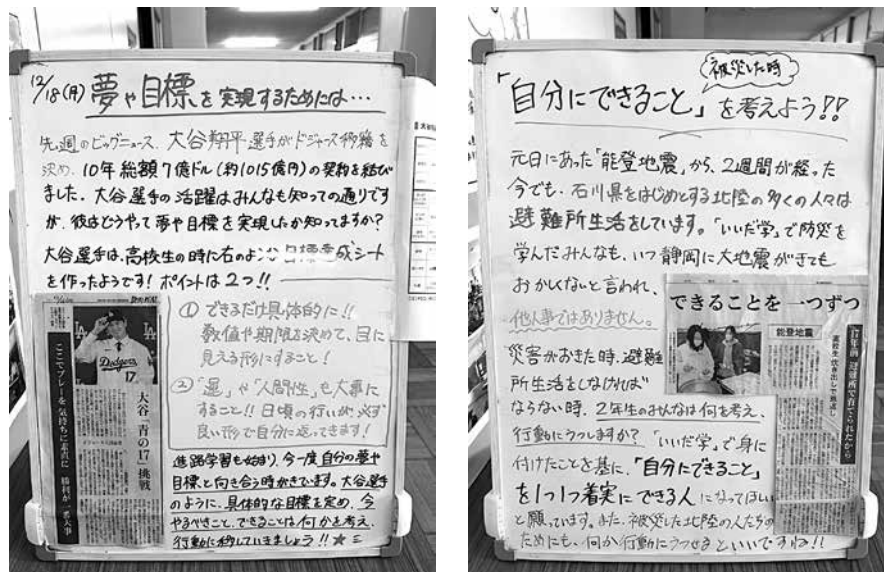
古い新聞紙の活用方法として、新聞紙を使った清掃活動を年間通して行ってきた。新聞紙を濡らして細かくちぎって教室や廊下にまき、それを一箇所に集めるようにほうきで掃くように指導した。濡れた新聞紙が教室等の隅にある細かい埃や塵を吸い取り、同時に雑巾で拭くことと同様の効果が見られた。また、窓や鏡にも新聞紙を濡らして拭くことで、新聞紙のインクに含まれる油分が汚れを落とし、きれいにする事ができた。生徒たちは、目に見えない埃や塵を掃くのではなく、「濡れた新聞紙を集める」という目標をもって清掃活動に取り組むことができ、掃除に達成感を得ることができていた。



③ 新聞を活用した学年メッセージボード（通年）

学年の生徒が必ず通る廊下に、学年部の教員が日替わりで書くメッセージボードを設置した。そのボードには、各教員の思いが毎日書き込まれていたが、新聞を活用して学年の生徒にメッセージを送る教員もいた。アメリカのメジャーリーグで活躍する大谷翔平選手の記事や、2024年1月に起こった能登半島地震の記事を取り上げ、生徒たちに伝えたい思いや考

えさせたい事柄を投げかけるメッセージが書かれていた。



④ 「新聞紙タワー」をつくるグループエンカウンター（4月）

新しい年度になり初めて会うクラスメイトも多い中、人間関係作りを目的として「新聞紙タワー」をつくるグループエンカウンターを行った。「新聞紙タワー」の主なルールは、①新聞紙を使って制限時間内にできるだけ高いタワーを作ること、②テープやのりを使わないこと、③新聞をちぎることは可能、という3つである。このルールのもと、4人～5人のグループで役割分担をしながら1つのものを創り上げる経験を通して、生徒たちは互いに思ったことを伝え合い、完成させたいビジョンを共有し合いながら活動に取り組み、仲間づくりに努める姿が見られた。



⑤ 「新聞の読み方講座」の実施（5月）

静岡新聞社から講師を招き、新聞の読み取り方や取り扱う情報について、実際に小グループで活動しながら学習した。講師から新聞の特徴を学び、新聞の効果的な活用方法を教えてもらうことができた。生徒たちは、見出しの大切さや新聞記事の工夫に気付くことができ、講座の最後には「新聞の作り方」を学ぶことができた。その中で「読み手」をどれだけ意識できるかというポイントを教えてもらい、今後の新聞作りに活かそうとする姿が見られた。



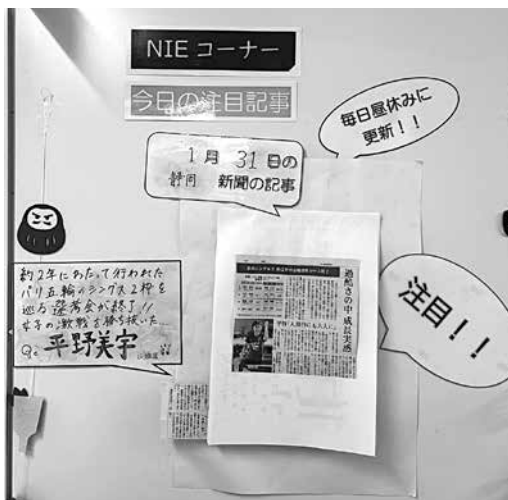
⑥ 「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募（夏休みの課題）

夏休みの課題として、日本新聞協会が主催する「いっしょに読もう！新聞コンクール」に応募した。本校は新聞をとっていない生徒が多いことから、学校の授業内でも扱い、できるだけ夏休み前に生徒たちが完成できるように時間を確保した。この取り組みは有志での提出としたが、学年の約7割の生徒が夏休み明けに出すことができた。その成果が認められ「学校奨励賞」を受賞することができた。

⑦ NIE系の創設→「今日の注目記事」紹介（後期の係活動）

令和5年度の後期は、各学級の係活動の1つとして「NIE係」を創設し、各クラスで1

名～2名の生徒がNIE係に就任した。この係の主な仕事内容は、週に1回（月曜日は1組が担当、火曜日は2組が担当…として1週間を回した。本学年は5クラスのため、月曜日～金曜日までの5日間を5クラスで当てはめることができた）昼休みに集まり、今日の新聞記事の中から学年のみんなに紹介したい新聞記事をスクラップし、そこにコメントをつけて記事を紹介するというものである。学年の生徒たちはNIE係の生徒たちが選んだ新聞記事を見つけ、感想を語り合う場面が見られた。また、NIE係を務めた生徒からは「より新聞を読むのが楽しくなった」「みんなが知らない記事を紹介して、得する情報を教えてあげたい」といった感想があり、生徒が能動的に新聞と関わる有効な手段の1つになり得ると感じることができた。



3. 成果と課題

本校では、このように2年間にわたって授業だけでなく、学校の教育活動全般でNIEの実践を行ってきた。その成果を見るため、実態把握で行った第1回質問紙調査（2023年4月10日、n=143）と比較できるように第2回質問紙調査（2024年1月18日、n=131）を行った。以下は、その結果である。

<p>【質問1】 あなたは新聞が好きですか？ （太枠が今回の調査結果、筆者加筆）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>はい</td> <td>3.5%</td> <td>7.6%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといえば、はい</td> <td>19.6%</td> <td>32.1%</td> </tr> <tr> <td>どちらかといえば、いいえ</td> <td>36.4%</td> <td>50.4%</td> </tr> <tr> <td>いいえ</td> <td>40.5%</td> <td>9.9%</td> </tr> </tbody> </table>		第1回	第2回	はい	3.5%	7.6%	どちらかといえば、はい	19.6%	32.1%	どちらかといえば、いいえ	36.4%	50.4%	いいえ	40.5%	9.9%	<p>【質問2】 あなたは新聞をどのくらい読みますか？ （太枠が今回の調査結果、筆者加筆）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ほぼ毎日読む</td> <td>2.1%</td> <td>3.1%</td> </tr> <tr> <td>週に3～4日読む</td> <td>0%</td> <td>2.3%</td> </tr> <tr> <td>週に1～2日読む</td> <td>16.8%</td> <td>32.1%</td> </tr> <tr> <td>まったく読まない</td> <td>81.1%</td> <td>62.6%</td> </tr> </tbody> </table>		第1回	第2回	ほぼ毎日読む	2.1%	3.1%	週に3～4日読む	0%	2.3%	週に1～2日読む	16.8%	32.1%	まったく読まない	81.1%	62.6%
	第1回	第2回																													
はい	3.5%	7.6%																													
どちらかといえば、はい	19.6%	32.1%																													
どちらかといえば、いいえ	36.4%	50.4%																													
いいえ	40.5%	9.9%																													
	第1回	第2回																													
ほぼ毎日読む	2.1%	3.1%																													
週に3～4日読む	0%	2.3%																													
週に1～2日読む	16.8%	32.1%																													
まったく読まない	81.1%	62.6%																													
<p>【質問3】 あなたは新聞に対して、どのようなイメージをもっていますか？（筆者抜粋）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報源 ・正確で誰が見ても分かりやすい記事 ・たくさんの工夫がされていておもしろい ・他の県や他の国のことが知れる ・色んな人に出会える ・素早く情報が手に入る ・難しいイメージだったけど、読み方を工夫すれば簡単に読むことができる ・とても身近なもの ・ネットニュースより、地元の記事などが詳しく載っていておもしろい ・いつでも読み返せる ・時々アニメや漫画の全面広告が載っていて、驚いた ・テレビのニュースとはまた違った良さがある ・見出しをよく考えてつくってある ・インターネットより信頼性があるって便利なもの ・学びや情報の場だと思う ・テレビのニュースと違って、自分のペースで読める 																															
<p>【質問4】 2年生になった4月の頃より、新聞を身近に感じることはできましたか？</p> <table border="1"> <tbody> <tr> <td>はい</td> <td>69.5%</td> </tr> <tr> <td>変わらない</td> <td>26.0%</td> </tr> <tr> <td>いいえ</td> <td>4.5%</td> </tr> </tbody> </table>	はい	69.5%	変わらない	26.0%	いいえ	4.5%	<p>【質問5】 NIEを通して、学校生活がワクワクしたものになりましたか？</p> <table border="1"> <tbody> <tr> <td>なった</td> <td>12.3%</td> </tr> <tr> <td>少しなった</td> <td>49.6%</td> </tr> <tr> <td>あまりならなかった</td> <td>30.5%</td> </tr> <tr> <td>ならなかった</td> <td>7.6%</td> </tr> </tbody> </table>	なった	12.3%	少しなった	49.6%	あまりならなかった	30.5%	ならなかった	7.6%																
はい	69.5%																														
変わらない	26.0%																														
いいえ	4.5%																														
なった	12.3%																														
少しなった	49.6%																														
あまりならなかった	30.5%																														
ならなかった	7.6%																														

(1) 成果

- ・「新聞が好き」と答えた生徒の肯定群が、16.6ポイント上昇した。

- ・「新聞をまったく読まない」と答えた生徒が18.5ポイント減少し、生徒たちの新聞を読む機会が増えた。
- ・新聞に対する印象が明らかに肯定的になり、また新聞の特徴を捉えたイメージに変わっていた。現代の多様な情報源（マスメディアやインターネットなど）がある中でも、他のメディアとの差異を見つけ、新聞の良さを味わう生徒が多くなった。また、このような高度な情報化社会に生きる生徒たちにとって、新聞はなくてはならないものであると感じている生徒も多くなった。
- ・以前と比べ「新聞を身近に感じる」と答えた生徒が約7割となり、様々な教育活動を通じてこれまであまり新聞を身近に感じてこなかった本校の生徒の多くが、新聞を身近に感じるようになった。
- ・「NIEを通して、学校生活がワクワクしたものになった」と答えた生徒の肯定群が、61.9%であった。本校2年生の生徒の約6割が、NIEを通して学校生活にワクワク感を少しでも感じてくれた。本実践を行うにあたって抱いていた「NIEを活用して学校をより良くしたい」という思いに対して、一定の成果があったと感じている。

(2) 課題

- ・「新聞が好き」と答えた生徒の肯定群のポイントは上がったが、依然として約6割の生徒が否定群に存在する。また、「新聞をまったく読まない」と答えた生徒も約6割いることから、2年間のNIEの取り組みで一定の成果は見られたものの、一朝一夕の実践では大きく数値が向上することがないことから、今後も継続してNIE活動を行う必要性を感じた。
- ・本校のNIEを推進する担当教員は、学年主任や総合的な学習の時間の校務分掌を兼任していたため、今回の実践ではNIE活動に全力を傾注できなかったことは否めない。また、多忙な学校現場の状況を踏まえ、担当する教員以外の協力をあまり得ることができなかった。新聞を活用して学校改善が推進される可能性を見出すことはできたが、その実現のためには学校体制でNIEに本気で取り組む必要性を感じた。

(3) 今後の展望

今回の機会を捉え、NIEを授業だけの実践にとどめず、学校の教育活動全体に行き渡らせることで単に「新聞が好きな生徒を育成する」「新聞を身近に感じてもらう」だけでなく、学校改善や学年改善に活用することはできないかと考え、その可能性を見いだすことができたと考えている。実践校として活動した2年という期間は長いようで短く、とりわけ新聞の良さや有効性を生徒たちに浸透させ、学校生活に潤いを与えるツールの1つであると多くの生徒に実感をさせるようになるまでには、もっと長期的な視点が不可欠であると感じた。それでも、NIEという種が蒔かれ、校務分掌・校内研修・全教職員での指導体制等の土壌が整うことで、より良い学校づくり（学校改善）という大輪が開くであろうと確信している。今後でもできることからNIEを継続し、様々な場面で新聞を活用しながら生徒たちと共にワクワクした学校生活を創り上げていきたい。

新聞を学習から日常へ

～新聞を使って生徒の論理的思考力向上を図る～

藤枝市立広幡中学校 石橋 直明

1. はじめに

現在、学校教育では生徒の論理的思考力を向上させるということが目標の一つに設定されている。また、PISA（国際的な学習到達度調査）でNIE推進国である韓国、フィンランドが高い読解力があると結果が出ている。しかし、令和4年度とった生徒向けアンケートでは、新聞を家で購読しない家庭が40%以上あることがわかり、家にあってもほとんどの生徒が新聞を見ないということが分かった。また、国語の授業内でアンケートを取ると、1年間で本を全く読まない生徒が多数いた。これは学校でも朝読書がなくなり、本格的に読書離れや活字離れが進んで、文章に慣れ親しむ習慣がなくなってきたことに起因すると考えられる。テストでは記述問題の正答率が低く、論理的思考力が低い生徒が多い傾向にあると考えられる。これはテストだけでなく、発表などでも顕著に見られ、校内研修でも「発表で根拠が言えない」「事実に基づいて考えを形成できない」などの弱点が見られると多くの教員から意見が出た。そのような実態を打破するため学校教育活動にできるだけ新聞を使った取り組みをして、生徒が新聞に慣れ親しむことを目標に実践してきた。また、本校ではNIEの目的として、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力の育成を目指すものとした。学校経営計画に、「文章の意味を正確に理解する読解力を高め、自分の考えをしっかりと持ち、言葉や文章で表現できる生徒の育成」、「社会的事象を多面的多角的にとらえることのできる生徒の育成」を位置づけ、それらを、NIEを通して育むということを全教員で共通意識とした。何よりも、活動に対して生徒が主体的に取り組めるよう、工夫をしながらNIE活動を行った。新聞を学習の役に立つものから、日常的に読むものとして捉え方を変え、日頃から論理的思考力の向上に努めることができるようにしたいという願いを持ちながら実践した。

2. 実践の概要

本校のNIEの目標として、1年目では、「新聞が学習の役に立った」生徒を増やす（数値目標80%）、2年目では、「新聞を読むことが増えた」生徒を増やす（数値目標50%）とし、2年かけて新聞を授業で使うものから日常的に読むものへ変化するよう狙いを持って実践を行った。また、本校の校内研修の中で、NIEをどのように実践していくか話し合った。そこで、「新聞を使う」「新聞を作る」という主に2つのパターンで実践していくことになった。「新聞を使う」では、記事の読み取りというインプットをさせ、「新聞を作る」では、考えたことを新聞にまとめるというアウトプットをさせて、生徒の論理的思考力を育成していくことができた。また、授業だけでなく、生徒会活動やその他学校教育活動で新聞を使用し、慣れ親しむ生徒の育成を目指していった。以下、①授業での取り組み、②生徒会での取り組み、③その他学校教育活動での取り組みの3つの柱で報告していく。

(1) 授業での取り組み

ア 国語での実践

教科・学年	【国語】第2学年	使用した新聞	静岡新聞
单元名	短歌の世界		
新聞活用のねらい	新聞に載っている単語で五音、七音のものを抜き出し、組み合わせて短歌を作り出す。		

<学習の流れ>

- ① 新聞を読み五音七音の単語を抜き出す。
- ② それを組み合わせる短歌を作り出す。
- ③ 各班で作った短歌を共有し、一番クラスの中で、出来が良い物を決める。

<成果と課題> ◎成果 △課題

- ◎「夏空に まぶしい光 ギラギラと 日に照らされた ビーチサンダル」という体言止めや季語を意識したものができた。
- ◎短歌について興味を持つと同時に新聞に慣れ親しむことができた。
- △目につくのは広告やテレビ欄で中々文章の中から抜き出してつくるができなかった。

イ 総合的な学習の時間での実践

教科・学年	【総合】第2学年	使用した新聞	静岡新聞
単元名	地域まちあるき		
新聞活用のねらい	地域探訪で学んだことを新聞形式にまとめた。		

<学習の流れ>

- ① 新聞を作る前に、新聞で工夫していることについて共有した。
 - ② 地域探訪で学んだことを新聞形式にまとめた。
 - ③ 各班で作った新聞を見せ合い、学んだことを共有した。
- ※国語でも同じような活動を行った。

資料「総合的な学習の時間のまとめ新聞」



資料「セミロングホームルーム新聞（国語）」



<成果と課題> ◎成果 △課題

- ◎「四コマ漫画を入れて面白くしている」や「できるだけ言い切りの形で書いて説得力を持たせている」ということなどを見つかることができた。

- ◎情報を分かりやすく整理するためのツールとして用いることができた。
- ◎新聞の特性である「情報を分かりやすくできるだけ細かく伝える」というものにするにはどのようにしたら良いのか考えることができた。

ウ 英語での実践

教科・学年	【英語科】 第3学年	使用した新聞	静岡新聞
単元名	Unit3 「Lessons From Hiroshima」等における帯活動		
新聞活用のねらい	英字新聞の記事を読み取る活動を通して、学んだことや知ったこと、感じたことなどについて、既習表現を用いてペアでやり取りすることができる。		

<学習の流れ>

- ① ニュース動画（週刊 YOMO っと「静岡 Let's えい GO!」記事の QR コードを使用）を視聴する。
- ② 視聴した動画の記事を黙読する。
- ③ 内容に関する SmallTalk を行うなどして、ペアや全体で共有する。
- ④ 記事に関する自分の感想をペアでやり取りする。
- ⑤ 数人を指名し、全体で発表や共有をする。
- ⑥ ペアでのやり取りにおいて、自分が話した内容をワークシートに記入し、ペアでチェックをし合う。

資料「自分の感想をペアでやり取りするためのツール」

Today's Topic for Small Talk

**What do you think after reading?
Let's share.**

- I think ...
- To ... is ...
- We can ... if we ...
- We should ...
- I didn't ...
- I want to ...
- ... is better than ...

edit.kyodonews.net/english/kids/video/file/299372_video1_1.mp4

資料「実際視聴した動画」



<成果と課題> ◎成果 △課題

- ◎さまざまな新聞記事を通して、世界で今起きている出来事や話題となっている出来事に触れる機会となり、記事の内容に興味をもったり、出来事を初めて知り驚いたりする生徒の姿が多く見られた。
- ◎単元のゴールを「記事を読んで、内容について自分が感じたことや思いなどを発表する」と設定したため、ゴールに向けて毎時間帯活動を継続したことにより、本番のパフォーマンステストでは既習表現を活用して、自分の思いや考えを積極的に伝える姿が見られた。
- △日本語においても自分の思いをもったり、自分の考えを伝えたりすることが苦手な生徒にとっては、英語でのやり取りはハードルがかなり高くなってしまっていたと感じる。英語の授業だけでなく、日頃から自分の思いや考えを書いたり、伝えたりといったアウトプットする機会をもつことが重要であると考えます。
- △記事にでてくる単語や記事自体が難しい内容であると、やり取りの継続が難しいペアが見られた。英語の基礎基本の定着はもちろん、普段からニュースや新聞等に触れたり、知識を得たりする機会を確保することが課題である。

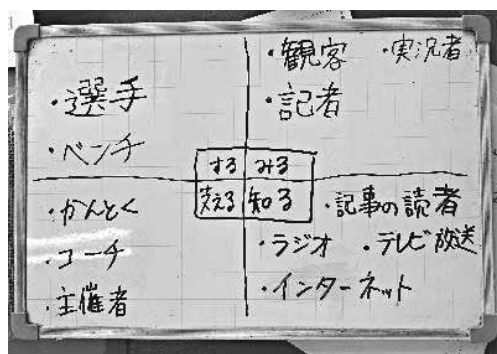
エ 技能教科（保健体育）での実践

教科・学年	【保健体育科】第1学年	使用した新聞	静岡新聞、中日新聞 朝日新聞、毎日新聞
単元名	運動やスポーツの多様性（運動やスポーツへの多様な関わり方）		
新聞活用のねらい	運動やスポーツとの関わり方について、身の回りで行われている活動を新聞から読み取り、その活動に人々がどう関わっているかを考えることを通して、この先自分がどう運動やスポーツに関わっていけるか考えることができる。		

<学習の流れ>

- ① 運動やスポーツには『すること』『見ること』『支えること』『知ること』という関わり方があることを知る。
- ② 各班に一記事を配布し、その取り組みや活動、イベントがどのようなものか確認させ、人々がどのように関わっているかを話し合わせる（各班に配布した資料は、全て異なる記事）。
- ③ 各班の話し合いの内容を全体で共有する。
- ④ 学校や地域で開催されるスポーツイベントに、自分がどのように関わることができるか、『する・見る・支える・知る』の視点から考える。

資料「話し合いの記録」



資料「実際に使った記事」



<成果と課題> ◎成果 △課題

- ◎新聞記事を通して、競技スポーツだけでなく、様々なスポーツイベント、大会等が行われていることを知る機会となり、記事の内容に興味をもったり、他の班の記事に質問したりする生徒の姿が見られた。
- △今回の実践では、教員側が新聞記事を選び、提示した。新聞に触れる機会を増やすために、自分で記事を探し、自身の興味関心に基づいた取り組みを行っていくことが必要であると感じた。

(2) 生徒会での取り組み

ア 委員会ごと「〇〇委員会新聞」を作成

例えば、図書委員会は、写真の通り、本を読むことのメリットを特集したり、おすすめの本を紹介させたりした。その中では、見出しを工夫させたり、必要な写真、データを取捨選択して貼ったりして新聞の特徴について学んだ。それにより、情報を分かりやすく明確にする工夫をすることができた。

イ 委員会による「ちょこっとNIEコーナー」の設置

例えば、保健専門委員会では新聞に載っている健康に関する情報を届けるものを掲示した。切り抜きに対して情報や思ったことを付け足し、より多くの情報を伝えることができた。

まとめさせたり、それに対する感想を書かせたりする課題を通して、じっくり新聞記事に日常から向き合う時間を作ることができた。

資料「長期休業中課題のNIEレポート」

アフリカ貧困国 危機感
穀物輸出急減ロシア離脱
食料価格上昇「弱い人々打撃」

② (2023)年(7)月(18)日(火)曜日(静岡)新聞より
③ (アフリカ)州の(に)関係する(ニュース)

④ 記事の内容を簡単にまとめると...
・アフリカは世界有数の穀物生産国。その輸出を減らしたため、ロシアをめぐって、食料が不足し、食料の価格が上昇していることが報告されている。
・アフリカはウクライナから小麦を半数以上輸入している。アフリカは支那以外の国の中でも穀物輸入依存度が最も高い国であるため、食料不足のリスクが非常に高いと見られる。

⑤ SDGsのどの項目(用語のアイコン)と関係しそうか、地理の教科書IVまたは資料集1-2ページを見ながらアイコンの番号と説明を書こう。(いくつか書いてもよいです)
① アフリカは生活に困窮している。
② 食料不足になると食料の価格が上がる。食料不足は深刻な問題である。

⑥ 記事を読んだ感想 or 自分の生活にどう関係がありそうか or 関係させることができそうか。
・食料不足によって他の国にも食料不足が出てくる。
・輸入に依存している国は食料不足のリスクがある。自給自足に力を入れることが重要である。
・食料不足は貧困を悪化させる可能性がある。食料不足は深刻な問題である。

資料「長期休業中課題の新聞読みました」

新聞記事 読みました

新聞名: 静岡新聞 記事が載った日付: 11月18日
記事の見出し: 北朝鮮 韓米対立 年越しの対決
記事の内容: (3日、北朝鮮が日本に対してサイバー攻撃を断行した。11月もEEZ外に侵入した。)

読んだ感想・考えたこと
最近何回もサイバー攻撃のニュースや記事を見るから、11月にも侵入するかもしれないと心配。
また、航空機への影響もあるから、攻撃はやめてほしい。

新聞名: 静岡新聞 記事が載った日付: 12月27日
記事の見出し: 食料価格 2年で1.7倍
記事の内容: (主要食品メーカーが値上げした食品は2万品目を超えた。2023年6月74品目を超え、7月には2万品目を超え、12月には2万品目を超えた。)

読んだ感想・考えたこと
値上げされたロシア産小麦の5割は食料の面で日本に消費されてきた。
消費者が買うのを止めてしまうことはいけず、スーパーでも値上げの品を置いておくのは必要で、国産食料の消費を促さなければならない。

3. 実践の成果と課題

(1) 成果

NIEの意識調査として、全校生徒対象にアンケートを行った。その結果、成果として「新聞が学習の役に立ったと実感している生徒」が60%、「新聞を読むことが増えたと感じている生徒」が35%と、当初ほとんど新聞を読む生徒が少なかったのと比べると、新聞を意識している生徒の割合が劇的に増えたことが分かる。目標として定めていた「新聞を学習から日常へ落とし込む」というものをある程度達成することができた。

(2) 課題

新聞が日常的に読まれてきている傾向が見られるが、半数の家庭には新聞が無いことがアンケートにより分かった。それにより、数値目標としていた「新聞が学習の役に立った生徒」80%、「新聞を読むことが増えた生徒」50%は未達成であった。新聞を活用した活動を数々行ったが、生徒たちの「活字離れ」を克服しきることができなかった。また、NIEを推進してきたが、文章力の向上になかなか繋がらなかったという課題も見られた。研修の中で、生徒の書いたワークシートには言葉の選択のミスは減っておらず、主張に根拠を持って考えられている生徒もあまり増えていないということが話題になった。

今回の実践を通して、生徒たちに少しは新聞に慣れ親しませることができ、論理的思考力の向上の糸口になった。しかし、新聞がある家庭が半数しかおらずなかなか学校での実践だけでは新聞を読む習慣をつけることはできなかった。文章力の向上のためにもこれからも継続して新聞を活用していきたい。

NIE教育を活用した 主体的に学び、 自分の考えを表現することができる生徒の育成

浜松市立春野中学校 武井 千幸

1. はじめに

春野中学校は、浜松市天竜区の中山間地に立地している小規模僻地校である。現在の春野町の人口は3,569人、中学校の全校生徒数は47名（1年16名、2年16名、3年15名）であり、年々減少している。人間関係は、幼・小・中と単学級であるためあまり変化をしていない。そのため生徒は毎日、お互いの人間関係に気を配りながら学校生活を送っている。

このような環境の中で、本校では、「春野を誇りとし、自他を認め、成長する生徒 ～切磋琢磨～」という学校教育目標のもと、どのように「主体的に学ぶ生徒の育成」「自分の考えを表現できる生徒の育成」をしていくのかを思慮していたところ、日本新聞協会の「NIE実践指定」を受けることとなった。そこで「NIE教育」を通して、様々な情報を分析して、自分の考えを持ちたり、伝える相手を意識して表現したりすることが、「主体的に学び、自分の考えを表現することができる生徒の育成」につながると考え、実践に取り組んできた。なお、今回のNIE実践指定期間は令和4年度から令和5年度までの2年間である。



2. 実践内容

① 全職員で目的の共有

令和4年度の実践は準備期間と位置づけ、新聞コーナーの設置や新聞スクラップ、新聞記事の読み聞かせ等、学校生活の中で新聞にふれることができる環境作りに努めた。また、校内研修では静岡新聞社から講師をお招きし、教員向けNIE教育研修会を実施した。そして年度末には、1・2年生を対象に「新聞学習に関する調査」を行った。その結果「新聞を読むことで自分の知識が高まると感じている生徒」は100%であったが、「新聞を読む習慣がある」や「記事の分からない言葉や表現を調べることがある」などの質問に対する肯定的な回答が非常に低かった（R4アンケート結果参照）。また世の中の出來事に対して、自分の意見や考えを言葉や文章で表現することに苦手意識を持っている生徒が多いことも分かった。そこで、情報を収集する力や自己の考えを端的に表現する力を向上させる手段として、NIE教育を令和5年度の教育課程に位置づけた。そうすることで「主体的・対話的で深い学び」や「個に応じた指導」などに新聞を活用すること、また、その目的が、生徒の多面的・多角的な考察力や適切に考え判断する力、表現する力の育成であることを全職員で共有した。

< R 4 1・2年生を対象とした「新聞に関するアンケート」の結果 ※回答者 28人 >

Q 1 「新聞を読む習慣はありますか？」

読む		ときどき読む		どちらともいえない		あまり読まない		読まない	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
2人	7.1%	5人	17.9%	4人	14.3%	9人	32.1%	8人	28.6%

Q 2 「記事を読んでいて分からない言葉や表現を聞いたり、調べたりしますか？」

する		ときどきする		どちらともいえない		あまりしない		しない	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
4人	14.3%	7人	25.0%	4人	14.3%	11人	39.3%	2人	7.1%

Q 3 「世の中のできごとに対して自分の意見や考えを文章で表現することができますか？」

できる		ときどきできる		どちらともいえない		あまりできない		できない	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
3人	10.7%	7人	25.0%	4人	14.3%	12人	42.9%	2人	7.1%

② 定期的な取り組み

NIE教育を推進するにあたり、授業だけの実践ではなく、日常的に取り組む時間を確保するために令和5年度から日課を大幅に変更した。変更は右の資料の通りである。

従来取り組んでいた「朝読書」を見直したり、朝の会と帰りの会の時間を短縮したりすることで、放課後の時間を「活動の時間」として確保し、NIE教育や行事練習など、柔軟な活動ができる時間にした。

③ NIE出前講座の実施

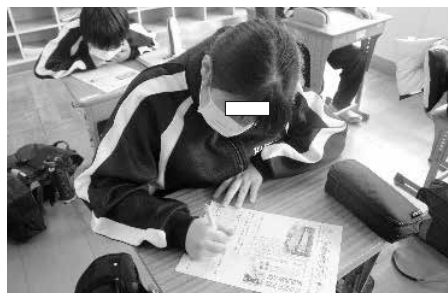
実践2年目当初の取り組みとして、4月に静岡新聞社のNIEコーディネーターの方を講師としてお招きし、生徒向けの出前講座を実施した。講師からは「新聞の特徴、網羅性、一覧性、伝達性、速報性、即時性」「見出しの付け方」など新聞づくりの基本を学ぶ機会となり、今後の取組に対する基盤とすることができた。

出前講座	8:00~ 8:15	
1校時	8:15~ 9:05	
2校時	9:15~10:05	
3校時	10:15~11:05	
4校時	11:15~12:05	
給食	12:05~12:30	
昼休み	12:30~13:00	
5校時	13:05~13:55	
6校時	14:05~14:55	
6時間 清掃なし (月・金)	6時間 清掃あり (火・木)	5時間 (水)
SHR 15:00~15:05	清掃 15:05~15:15	SHR 14:00~14:05
活動 15:05~15:30	SHR 15:20~15:30	活動 14:05~14:30
SB1 下校 15:35	SB1 下校 15:35	下校 14:35
【休 日】 火・水		
【部活動】 火・水・金		
【部活動日の完全下校時刻 (5日2時間)】		
4月~5月... 17:30		
6月~9月... 17:45		
10月~3月... 18:00		



④ NIEワークシートの活用

「情報を収集する力や自己の考えを端的に表現する力の向上」のためには、その基本となる「読む力・書く力・表現する力」を向上させる必要がある。そのため、②で説明した「活動の時間」を活用して、様々な新聞社が公開しているNIEワークシートに取り組んだ。記事を読み、問われている内容を考えることで読解力が身につく、それが個々の表現力につながると仮定した。また表現をするために必要な語彙力を豊かにすることを目的に、記事の中のわからない語句を調べ、その意味を記入する「語句調べカード」も併用することとした。複数の実践を絡み合わせることで、より効果的な成果につながった（成果については後述）。



⑤ 授業での実践

社会科の授業を中心に新聞を活用した実践を複数回行った。特に3年生の「公民」では、メディアリテラシーについて複数の新聞社の社説を読み、感想を発表する授業や、水俣病を巡る行政裁判についての記事を参考に「我々の基本的な人権はどのように守られているのか」など、実際に起こっている社会的事象について新聞をきっかけに興味・関心や知識、思考を深めることにつなげることができた。新聞を通して日本国憲法の条文が、我々一人ひとりの生活の向上とよりよい社会の形成に必要不可欠であることを体感することができた。

他にも国語科では、新聞記事を題材として意見文を作成する学習活動を行ったり、保健室では、毎日の感染症罹患患者数の推移を新聞から情報収集し、掲示したりした。



「メディアリテラシー」とは・・・
 1つの情報だけでなく、たくさんの情報を集め、それぞれの資料を照らし合わせながら考えること。
 1つの情報が正しいということではない。

⑥ 「総合的な学習の時間」のまとめ

修学旅行や職場体験活動等の各学年の行事の振り返りや、体育大会や文化発表会等の学校行事の振り返りなどを新聞形式でまとめる活動を取り入れた。その際、ただ、まとめるだけでなく、読み手（伝える相手）を意識して、分かりやすい情報提供ができるよう、実際の新聞を参考に見出しを付けたりレイアウトを工夫したりした。これらの活動の成果についても後述する。



3. 成果と課題

(1) 成果

< R5 2・3年生を対象とした「新聞に関するアンケート」の結果 ※回答者 30人 >

Q1 「新聞を読む機会は増えましたか？」

増えた		少し増えた		どちらともいえない		あまり増えなかった		増えなかった	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
2人	6.7%	12人	40.0%	3人	10%	10人	33.3%	3人	10%

Q2 「記事を読んでいて分からない言葉や表現を聞いたり、調べたりすることは増えましたか？」

増えた		少し増えた		どちらともいえない		あまり増えなかった		増えなかった	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
7人	23.3%	10人	33.3%	7人	23.3%	6人	20.0%	0人	0%

Q3 「世の中のできごとに対して自分の意見や考えを文章で表現することができるようになりましたか？」

できる		ときどきできる		どちらともいえない		あまりできない		できない	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
7人	23.3%	14人	46.7%	4人	13.3%	4人	13.3%	2人	7.1%

Q4 「NIE ワークシートに取り組んで書く力は高まりましたか？」

高まった		少し高まった		どちらともいえない		あまり高まらなかった		高まらなかった	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
8人	26.7%	19人	63.3%	2人	7.1%	0人	0%	1人	2.9%

Q4で「高まった」、「少し高まった」と答えた生徒の主な回答理由

- ・新聞記事から情報を採って説明したり、自分の考えをまとめたりすることができるようになったから。
- ・自分の考えや意見文を書くときに以前よりスムーズに書けるようになったから。
- ・新聞の情報を絡めながら自分の意見を書けるようになったから。
- ・文章の構成や言葉の使い方が分かるようになった。
- ・長い文章を的確に要約できるようになったから。 など

Q5 「行事ごとに行った成果や感想を新聞にまとめる作業を通して、『表現する力』は高まったと思いますか？」

高まった		少し高まった		どちらともいえない		あまり高まらなかった		高まらなかった	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
13人	43.3%	14人	46.7%	1人	3.3%	1人	3.3%	1人	3.3%

Q5で「高まった」、「少し高まった」と答えた生徒の主な回答理由

- ・自分の考えを読み手に分かりやすく伝えるための工夫のバリエーションが増えたから。
- ・新聞を作るときに読み手に伝わりやすい言葉を選ぶことができるようになった。

- ・行事の感想が今までより具体的に書けるようになった。
- ・自分が納得のいく文章やレイアウトを考えることができるようになった。
- ・小さな紙幅でも必要なことは何かを分かりやすく考えて書くことができた。
- ・記事の文章がスラスラかけるようになってきた。

アンケートの結果から、記事を読んで世の中の出来事に関心を持ったり、分からない言葉を主体的に調べる習慣が身に付いたりすることで自分の考えを表現できるようになった生徒が増えた。また、NIEワークシートへの定期的な取り組みにより、約9割の生徒が「読む力・書く力・表現する力は高まった」と自認することができた。気軽に短時間で取り組めるという利点を生かし、継続的に取り組んだ成果と言える。

行事のまとめとして新聞を作成する活動についても、約9割の生徒が「表現する力が高まった」と自認することができた。NIE出前講座において「新聞の特徴、網羅性、一覧性、伝達性、速報性、即時性」や「見出しの付け方」、「新聞づくりの基本」などを学んだことによって、「どのように作成すればよいのか」という視点が明確となった。また、NIEワークシートや語句調べという活動と連携することで、「読む力・書く力」という基礎・基本が高まり、新聞による「表現」につながった。

(2) 課題

「新聞を読む習慣がある (R4)」25%からNIE教育を通して「新聞を読む機会が増えた (R5)」46.7%。新聞に触れる機会は増えた。しかし、図書室に設置した新聞コーナーについては、「活用していない、あまり活用していない (R5)」合わせて70%という低い結果であった。日常的に新聞を読むことで多くの力が高まることを自認している生徒が多いにもかかわらず、与えられた教材だけではなく、自ら進んで主体的に新聞を読もうとする生徒が非常に少ないという結果となってしまった。

また、教員を対象として行った事後アンケートでは、「NIE教育によって向上したのか、普段の授業によって向上したのかの判断がつかない」「読み取りが苦手な生徒については底上げができたように感じるが、学力の高い生徒の向上につながったかどうかは判断が難しい」という意見が挙がった。生徒の力の伸長を測る手立てをもっと明確にする必要があった。

(3) 最後に

2年間NIE教育実践指定校として様々な実践に取り組んできた。実践を行う中で根幹にあったものは「世の中の出来事に対して子どもたちの見方や考え方を広げたい」という思いであった。新聞はそんな思いを具現化することができる有効な教材であったように感じる。なぜなら、生徒が新聞を活用することで、世の中の出来事を知り、自分事として捉えることができたり、他者の意見を参考に考えを深めたりするきっかけとすることができたからである。

私自身、毎日複数社の新聞を読むことで知見が広がり、子どもたちとの会話のきっかけや授業での説明に大いに役立てることができた。子どもたちだけではなく、教師の教養を広げる意味でも新聞を教育に取り入れる活動は有意義であったと感じている。

この2年間の実践とそれによって得られた経験を今後どのように生かし発展させていくか、全職員で考えていきたい。



知的障害特別支援学校高等部生徒の 新聞を教材として活用した授業実践

～生徒、教師が取り組んだ南の丘NIEチャレンジの報告～

静岡北特別支援学校 南の丘分校 鈴木 雅義

1. はじめに

(1) 学校概要

南の丘分校は静岡北特別支援学校の分校（高等部単独校）として、平成16年4月に県立静岡南高等学校内に設置され、平成25年に県立駿河総合高校内（静岡市駿河区有東）に移転し来年度開校20周年を迎える学校である。「働く意欲に富み、社会人としての自覚をもった人材育成」を目指し、職業教育と共生・共育を教育の柱に据えて取り組んでいる。全校生徒数は、54人のコンパクトな学校である。進路は3年間で6回の職場実習を行い、3年間の学びを通して、企業就労を実現できる生徒が多い。

南の丘分校の生徒の多くは、入学時に「立派な社会人になりたい」「作業学習を頑張りたい」と働く生活を基盤に社会で活躍できる人になりたいという希望をもって学校生活に期待をもっている生徒たちが多い。反面、人間関係のトラブル等から、「失敗したらどうしよう」「うまく人と話せるか心配」等、消極的な発言を耳にすることもある。また、失敗経験を積んできていることから、「どうせできない」「やっても仕方ない」等、自己肯定感が低い傾向にある。



2. NIE実践の概要

(1) 南の丘NIEチャレンジについて

本校は、令和4、5年度にNIE実践指定校になり、知的障害特別支援学校での新聞活用について模索し実践を進めた。まずはじめに、学校全体の組織で取り組めるよう、NIEについて理解を図るべく主任会、運営委員会、職員会議と意見をもらいながら進め方について検討した。NIEを進めるにあたり、無理に新聞を使うのではなく、必要だから使うというスタンスと無理しないで取り組むことを念頭に掲げた。また、NIEの活動を「南の丘NIEチャレンジ」と銘打って、生徒の様子を見ながら挑戦していこうという方針を示した。学校組織全体で取り組めるよう、学校の経営方針に記載し、教師全体への意識を高めスタートした。

(2) 知的障害特別支援学校でのNIEについて

知的障害をもつ生徒がどのように新聞とかわかり、自分で情報を集めたり活用したりするかについては実践例が少ないのが現状である。過去実践校の発表より、知的障害特別支援学校で新聞を扱うことについて授業で扱う選択肢になった。しかしながら、通常の新聞では内容が難しく、使用しきれないという課題が生じた。また、子供新聞のように要約されていたり、振り仮名がついていたりする内容であるとかえって簡単になってしまうことや実年齢から離れていることが指摘された。

南の丘分校の生徒がNIEを通じて、新聞の良さが分かり生活の一部として活用することのできる方策を練ることで生涯にわたって新聞から情報を得られやすくなるのではないかと仮定して取り組むこととした。

(3) 南の丘チャレンジの目的と進め方

ア 目的

- (ア) 生徒が、「新聞を見ること」、「開くこと」、「読むこと」に慣れることのできる環境を整備する。
生徒が、日々の生活の中で新聞を読む習慣を身につけ、興味や関心を広げ、膨大な記事から必要な情報を取捨選択し活用することを目指す。
- (イ) 社会の出来事への関心を高め、自分の言葉で話すことができる素養を育てる。

イ 方法

- (ア) NIEチャレンジコーナーや新聞スペースを設置したり、図書コーナーの一部を新聞コーナーにしたりして新聞をより身近に感じられるようにする。
- (イ) 朝の読書の時間や授業の中に新聞を取り入れたり、情報の取捨選択方法を示したりして新聞に興味をもてるようにする。
- (ウ) 社会の出来事が自分の生活に結び付いているということを知ることができるよう、関連付ける。
また、その内容について自分のこととして考えられるように視点を明確にする。

ウ 内容について

	内容	教育課程への位置づけ
1年目 (令和4年度)	活用例の紹介 実践例収集 新聞を活用する授業の構想 新聞感想文コンクール応募	国語の時間を中心に取り組む
2年目 (令和5年度)	知的障害特別支援学校高等部での効果的な活用について探る 一人一NIE実践シート作成 新聞感想文コンクール応募 新聞活用情報交換	週予定に組み込む(毎週火曜日または木曜日の2校時にNIEチャレンジの時間を設ける) 他教科(新聞が教材として必要な授業)

エ 具体的な進め方(ロードマップ)

	令和4年度		令和5年度	
	前期	後期	前期	後期
準備	NIEの進め方について職員会議等で提案する	活用例、実践例紹介		
環境	NIEチャレンジコーナーの整理	新聞コーナーの設置、運営	NIE、新聞コーナーの充実	
生徒	新聞リテラシーの向上 アンケート実施	段階を経ながら新聞を活用 新聞コンクール応募 図書委員会との連携	新聞から読み取る、 新聞を作る、投稿する	新聞コンクール応募 アンケート実施
教師	情報収集 アンケート実施	授業実践方法について計画する NIE実践シートの作成	各教科で新聞を活用した授業実践	アンケート実施

NIEチャレンジを全校体制で進めるにあたり、上記の目的、方法、内容、NIEチャレンジの段階、具体的な道標を提示し、計画的に取り組んだ。

3. NIE実践の内容

(1) 成果

ONIEチャレンジコーナー、新聞配架コーナーの設置・運営

新聞に親しむところから始めるため、新聞が目にとまりやすい場所、手に取りやすい場所を考え、スペースを設置した。NIEチャレンジコーナーは、生徒の往来が多く移動の際、正面に位置する場所に設置した。このコーナーには、1面記事と地域の記事、SDGsにまつわる記事、一押しの記事の紙面を掲示した。掲示する際には、図書委員が毎朝新聞記事を掲示し、1面記事と地域の記事について、起こった出来事とそのことについて簡単な感想を書くようにした。また、併せて新聞の読み方、新聞の成り立ち等々の新聞にまつわる基礎知識的な内容を配置した。



NIEチャレンジコーナー

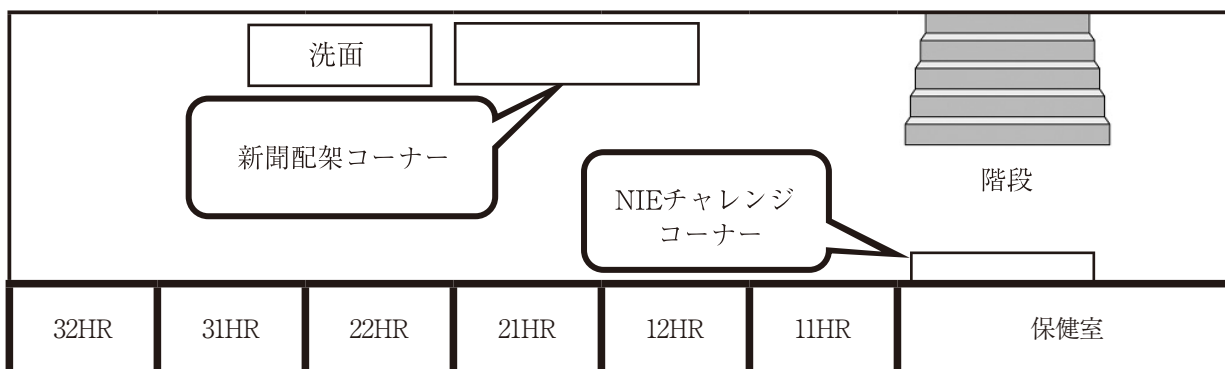


『今日の一面記事』『地域の記事』図書委員の感想



新聞配架コーナー

新聞配架コーナーは、教室棟の中央位置に設置し、生徒が新聞を取りやすい場所に設置した。このコーナーには、従来から設置されている静岡新聞のYoMoっと静岡、読売中高生新聞に加え、3紙～7紙を配架した。授業時に使用する際にも自由に選んで持ち出すことができるようにした。本コーナーについても毎朝、図書委員が配架した。授業で使用することはもちろん、休み時間に新聞を手にとって読む姿を見ることができた。また、朝、帰りのホームルームで今日の出来事を話す機会があるが、新聞から情報を得ている姿も見られた。



南の丘分校教室等配置図及び、NIE関連コーナー

(2) 新聞を活用した授業実践 I

高等部3年生の実践 国語科「NIEチャレンジタイム」

ア 学習指導要領の位置づけ

知的障害特別支援学校（高等部）1段階 思考力、判断力、表現力等 B書くこと

ウ 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして書き、表し方を工夫すること。

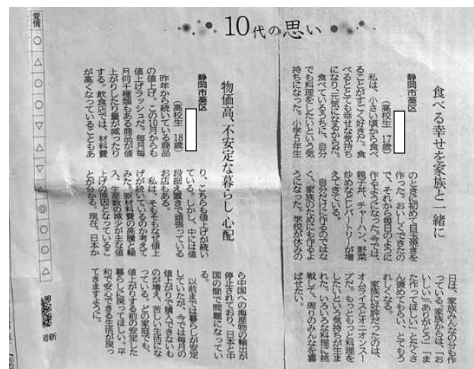
单元名「ありのままの自分を表現しよう」

单元目標 今思っていること、考えていることについて理由を付して書き、思いを伝えている。

教材 静岡新聞読者投稿欄「10代の思い」

イ 指導のねらい

読者投稿欄を教材として活用したねらいは、本単元の「ありのままの自分」を表現している投稿が多く掲載され、同年代である10代の気持ちを背伸びしない自分の言葉で書き表現しているため、難しく考えるのではなく、自由にありのままを表現してよいことに気付きを促すことにある。



ウ 授業の展開

個人で読者投稿欄を読む、触れることから始め、①ブレインストーミングのように感じたこと、思ったことをキーワードにする。②ペアになり感じたことの言葉交換を行う。③3～4人のグループで意見交換をする。④自分自身について触れ、同世代に伝えたい今の気持ちをキーワードで書き出し、キーワード化された言葉からテーマを決め、文章化するという設定で進めた。文章の構成を考えるため、投稿欄の文章について着目し、書き始めはどうなっているのか、どのように説明しているのか、最後はどのような結びになっているのか、生徒たち自身で考える場を設定する。最後に、自分で書いた文章を見直し、再構成するようにする。出来上がった文章は仲間同士で読み合い感想を求めるようにする。

エ 指導の留意点

- (ア) 新聞を生徒自身で読めるように、新聞記事を拡大したり難しい漢字にルビを振ったりする。
- (イ) 読み方のテンポやリズムを伝えるため、始めに教師が読み上げ、その後生徒が読むようにする。
- (ウ) 生徒の出したありのままの内容について肯定的な意見を伝える。また、「これでいいのかな」と考えている生徒に対して、表現したいことは自由に考えて良いことを強調して伝える。

オ 評価について

- (ア) 新聞記事からキーワードを抜き出すことができていたか。
- (イ) 仲間に自分自身の気付きや思いを伝えようとしていたか。

カ 生徒のあらわれ

新聞投稿欄の読み取りは、生徒の8割以上が記事を読みキーワードを見つけて丸で囲むことができていた。また、キーワードを選んだことについてペア、グループともに理由を話すことができていた。今の思いや気持ちについては、「なかなか思い浮かばない」と難しく感じている生徒がいた。再度投稿記事を読み返し、「こんなことでいいのかな」「本当の気持ちを書いてもいいのかな」と何を書けばいいのか理解が進んでいった。文章の組み立てについては、記事の書き方を参考にしながら文章の修正を行った。

キ 本授業を振り返って

新聞記事を活用しながら進めた本授業では、自分の思いを伝える文章の構成やありのままの自分を表現したことで、発表時に他の生徒から「いつもと違う一面が見られた」「○○さんらしいアーティストの内容だった」と共感を得ることができた。文章を書くことを苦手としている生徒たちがありのままの自分を生き生きと表現できたのは、投稿記事という同年代の思いが教材として生きたのではないかと考える。

実際に新聞に投稿し、多くの生徒の文章が掲載されたこともあり、お互いに称賛し合っている姿を見ることができた。生徒たちにとって新聞が身近な存在となった瞬間であった。

(3) 新聞を活用した授業実践Ⅱ

高等部2年 国語科 単元名「新聞記事に対する自分の考えをまとめよう」

学習指導要領の位置づけ

知的障害特別支援学校（高等部）1段階 思考力、判断力、表現力等 C読むこと

エ 目的を意識して中心となる語や文を見つけて要約すること。

単元目標 新聞記事に対して自分が思ったことや考えたことを文章で表現している。

周りの人に意見を聞き、自分の考えを発展させている。

ア 記事選び

自分の興味のある記事はどれか、自分の「意見」や「考え」を反映しやすい内容であるかどうか

イ 自分の意見を書く

自分の考えをまとめる「起承転結」で書く。

①この記事を選んだ理由②自分が思った、考えたこと

③今までの自分の考えと違ったこと④それを受けて感じたこと

ウ 他者の意見を聞いて書く「インタビュー」

家族、先生、友達、身近な人から意見を聞く。自分で聞く意識で行う。

①このインタビューをなぜしているのか（国語の課題）②何を答えてほしいのか（読んだ意見を聞きたい）③いつまでに意見を聞くのか、いつ聞くのか

エ 意見を受けて自分が考えたことを書く。

他人の意見を聞いて、自分が考えを深めたこと、自分の思いを書く前にメモをして書き出す。

①相手の話を聞いて思ったこと②考えが深められた部分、発展した部分

③今後自分ができそうなこと④記事の意見を書く

オ 授業を振り返って

本授業では、生徒が自ら考えられるように道筋を示したことで、まとめ方がわかり取り組むことができた。また、インタビューや他人の意見を聞き、その意見を取り入れながら進めたことでまとめの内容に幅が広がった。なお、この実践は、「第14回いっしょに読もう！新聞コンクール」で学校奨励賞を受賞した。

(4) 新聞を活用した授業実践Ⅲ

高等部3年 総合的な探求の時間 単元名「静岡市の魅力と横浜市の魅力」

単元目標 静岡市と横浜市の魅力を探し比較して考えられている。

両市についての魅力を新聞記事として表現している。

ア 生徒の様子

静岡市の魅力を新聞記事にまとめるところから始めた。初めての新聞記事作成ということもありまずは完成させることを目標に取り組んでいた。何回か作成をしたが、回数を重ねるごとに見出しやリード文を工夫しようと生徒同士が伝え合ったり、案を出し合ったりする様子が見られた。前回の反省から見やすさや記事を充実させることを意識して制作する姿が見られた。また、短時間で仕上げることができた。見出しは「13文字以内」「リード文は読み手に関心をもたせること」「記事は事実のみを書く」等の留意点を理解したうえで取り組むことができた。

イ 工夫した点

生徒各々が同時に制作に関わること、自分の担当に責任をもつことができるように、新聞名や見出し、リード文、記事の枠を準備した。それらを組み合わせて画用紙に貼り、1つの新聞として仕上げた。

ウ 実践者の感想

調べたことをまとめる際に、事実と感想を分けて書くため、整理してまとめることができた。



組み合わせで1つの新聞を仕上げるため、グループ内で協力する姿勢を引き出すことができた。新聞を読む機会をたくさん確保できれば、見出しの大切さやリード文の表現などがもう少し生徒たちにわかりやすくなったかもしれない。

(5) 学校全体で取り組んだNIE実践

NIE実践を進めるにあたり、本校では、NIEで取り組んだ内容や生徒のあらわれ、教師の感想などを記入できる、NIE実践シートを作成し活用することとした。その一例を紹介する。

	学年	内容	生徒の様子	工夫した点	教師の感想
1	高等部 1年	SDGsに関する 内容	食品ロスや環境問題に関する記事はイメージしやすく内容理解ができていた。その一方で、世界情勢や難民問題の内容理解は難しかった。	活動前に記事から読み取る内容を提示。生徒の学習状況に応じ、重要箇所に関するヒントを提示し、記事から分かったことを一緒に整理した。	初めてSDGsについて学ぶ生徒に分かりやすい教材を探した。SDGsを身近に知ってもらうため、イメージしやすい記事を精選する必要があった。
2	高等部 1年	県内甚大被害 台風15号 から1年	大きな被害があったことについて「覚えている」「自分の地域は断水の被害はなかった」「水がなくて、近所の人に分けてもらった」等の眩きがあった。	9月23日の新聞記事を用い、タイムリーな話題とした。教師の体験談も交え、現在もなお支援を必要としている人がいることを伝えた。	SHRで教員の小話として取り入れ、生徒に時事的な内容を伝えられ良かった。授業以外にも、日々の中で新聞を活用すると良いと思った。
3	高等部 2年	空気製水機を 利用した コーヒー について	実験器具を扱う機会が少ないこともあり、普段よりも意欲的な様子だった。鍋の水が減ることなどを実体験から話していた。	記事を読む前に水の状態変化について実験した（水の加熱と冷却を行い、空気中の水の存在と液体になることを理解する実験を1回ずつ）。	実験を通し、楽しんで学ぶ姿があったため、今後も実験を取り入れる等、事前学習や他教科とのつながりのある記事選びで意欲を引き出したい。
4	高等部 3年	『この人』 コーナー の活用 (通年)	静岡新聞の『この人』を読み、興味を持った箇所に線を引きながら読み進めた。「この人、すごいな」「新たな発見があった」と話す姿があった。	帰りのSHRの時間に取り組んだ。少ない時間でも新聞に触れることの時間を作った。	『この人』は、世の中のために何かをしているので、生徒の感想に社会で役に立ちたいという言葉があった。さらに活用していきたい。

4. 成果と課題

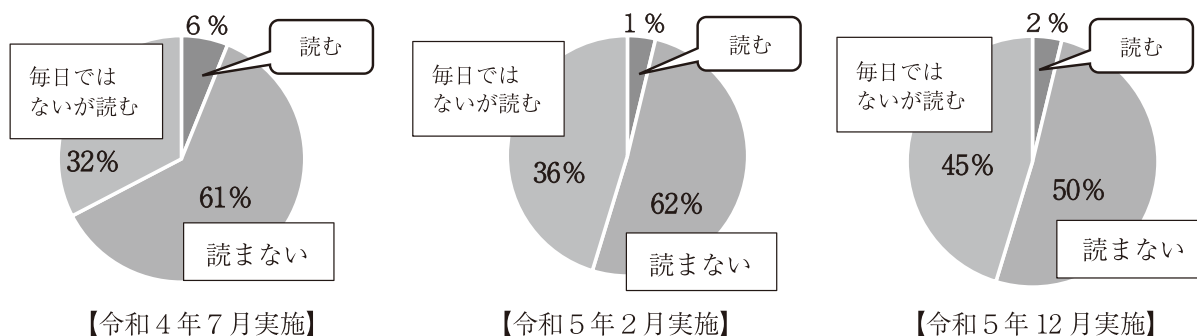
(1) 成果

上述してきたように、新聞を活用した実践の中で生徒たちは、新聞に触れ、新聞を読み、新聞を楽しみ、新聞を作ることができた。新聞を使った学習を通してものの見方や考え方、表現の仕方など、日常生活の中で表現している様子が見られることから、成果があったと考える。

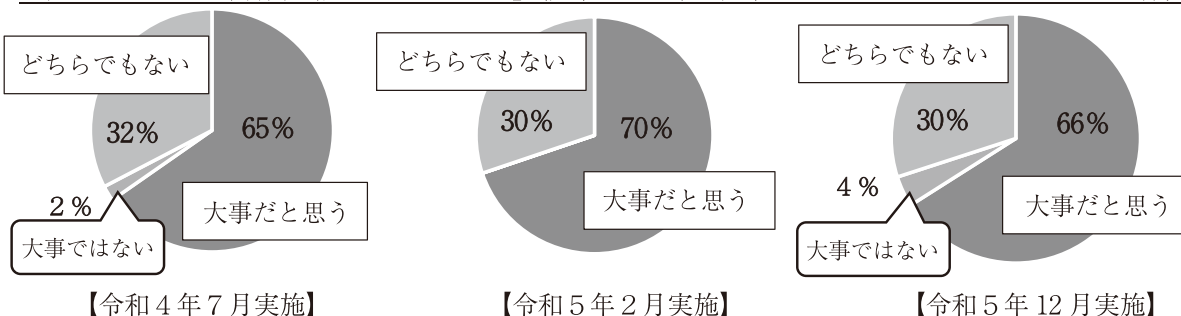
次頁に生徒アンケートを示す。2年間の実践で生徒の新聞に対する意識調査を行った。アンケートでは劇的な変化は見られなかったが、令和5年12月のアンケートで、「読まない」から「毎日ではないが読む」の人数が若干増加している。また、新聞について、社会に及ぼす影響を含めて新聞を読むことの大事さを調査した。その結果、読むことは大事であると考えた生徒が半数以上存在することが分かった。新聞を読むことは大事であるという意識に触れられたことは良かった。なお、インタビュー調査では、「新聞を使った授業が楽しかった」「新聞の見方が分かったので興味を持てた」という意見を得ることができた。新聞に対して苦手意識を持っていた生徒だったが、新聞の魅力に触れることができたのではないかと推察する。

運営面では、学校全体の活動として行うことができたことで、どんなタイミングでどのように活用していくかという進め方について教師が確認することができた。また、新聞を無理して授業に絡めるのではなく、タイムリーな話題や教材として活用できる記事を使うという方向性を示したことで、必要だから新聞を使うという流れになっていった。教師の新聞に対する意識調査では、NIE実践開始時にはICTが急速に発展している中、紙の媒体で授業をすることは難しく感じるという意見があった。実践を通して、新聞の持つ良さが分かり、教材として十分に活用することができるものだと分かったと前向きな意見をもらうことができた。時代やニーズに合わせていきながら、紙の新聞の持つ良さを一覧性を活用できるようにして取り組んでいきたい。

生徒アンケートⅠ「毎日新聞を読みますか」(読む、毎日ではないが読む、読まない、の3件法)



生徒アンケートⅡ「新聞を読むことについて」(大事だと思う、大事ではない、どちらでもない、の3件法)



(2) 課題

NIE実践指定校となったことで、校内体制が整ったり教師の新聞を教材として活用する意識が高くなったりして学校全体で取り組むことができたことから、継続的に活用することができるようにするための工夫が必要である。そして、新聞を読むことが大事であると分かっている生徒が多いことから、新聞を活用していく授業の中で新聞が新しい情報だけでなく、日常生活に密着していることが分かり、生徒自身にとって役立つツールとして使えるものであることを伝えるようにしたい。また、一人一人の教師がNIE実践で得られた新聞活用の良さを異動した際でも発揮できることが望ましいと考える。

紙の媒体の新聞の活用とICTを組み合わせることで取り組んでいくことがこれからのNIEに託されているため、両方の良さを取り入れた実践を研究して進める必要がある。

静岡県N I E 推進協議会 実践指定校一覧

2000 年度	熱海高、磐田・城山中、静岡西高、静岡聾学校、天竜・下阿多古中、静岡・長田南小、浜松・東小、三島・佐野小、掛川・桜木小
2001 年度	静岡西高、静岡聾学校、天竜・下阿多古中、静岡・長田南小、浜松・東小、三島・佐野小、掛川・桜木小、長泉高、小山・北郷中、浅羽中
2002 年度	長泉高、小山・北郷中、浅羽中、静岡城北高、磐田南高、浜松城北工業高、静岡中央高、焼津中、湖西中、静岡・富士見小、熱海・初島小、浜北・大平小
2003 年度	静岡城北高、磐田南高、浜松城北工業高、静岡中央高、焼津中、湖西中、静岡・富士見小、熱海・初島小、浜北・大平小、天竜養護学校、加藤学園暁秀中・高、浜松・江南中
2004 年度	天竜養護学校、加藤学園暁秀中・高、浜松・江南中、沼津城北高、静岡サレジオ高、城南静岡高・中、浜松・天竜中、韮山中、磐田東中・高、富士宮・大富士小、大井川東小、掛川・日坂小
2005 年度	沼津城北高、静岡サレジオ高、城南静岡高・中、浜松・天竜中、韮山中、磐田東中・高、富士宮・大富士小、大井川東小、掛川・日坂小、湖西高、沼津高中等部、岡部中、浜松・芳川北小
2006 年度	湖西高、沼津高中等部、岡部中、浜松・芳川北小、清水西高、日大三島高・中、東海大付属翔洋高、西部養護学校、磐田・一中、浜松日体中・高、静岡・長田北小、浜松・竜禅寺小、牧之原小
2007 年度	清水西高、日大三島高・中、東海大付属翔洋高、西部養護学校、磐田・一中、浜松日体中・高、静岡・長田北小、浜松・竜禅寺小、牧之原小、不二聖心女子学院、沼津・静浦中、静岡・安東小、浜松・豊岡小、御前崎・一小
2008 年度	東海大付属翔洋高、不二聖心女子学院、沼津・静浦中、静岡・安東小、浜松・豊岡小、御前崎・一小、大井川高、浜松・雄踏中、磐田・豊田南中、御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、静岡・清水小河内小、三島・徳倉小、清水町立南小
2009 年度	浜松・豊岡小、御前崎・一小、大井川高、浜松・雄踏中、磐田・豊田南中、御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、静岡・清水小河内小、三島・徳倉小、清水町立南小、川根高、浜松江之島高、富士・吉原三中、浜松学芸中・高、静岡・大里西小
2010 年度	御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、川根高、浜松江之島高、富士・吉原三中、浜松学芸中・高、静岡・大里西小、常葉学園中・高、下田東中、島田・金谷中、袋井中、静岡・東源台小、浜松・与進小、東伊豆・稲取小
2011 年度	浜松江之島高、浜松学芸中・高、常葉学園中・高、下田東中、島田・金谷中、袋井中、静岡・東源台小、浜松・与進小、東伊豆・稲取小、島田高、島田樟誠高、静岡・清水五中、浜松・北部中、御殿場・南中、磐田・神明中
2012 年度	常葉学園中・高、島田・金谷中、磐田・神明中、静岡・東源台小、浜松・有玉小、島田高、島田樟誠高、静岡・清水五中、浜松・北部中、御殿場・南中、富士宮東高、掛川工業高、浜松・三ヶ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、静岡・城北小、沼津・原小、静岡サレジオ小

- 2013年度 富士宮東高、掛川工業高、浜松・三ヶ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、静岡・城北小、沼津・原小、静岡サレジオ小、金谷高、浜松城北工業高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中、島田高、常葉学園中・高、島田・金谷中、静岡・東源台小、浜松・有玉小
- 2014年度 金谷高、浜松城北工業高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中、裾野高、駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、静岡・清水三保第一小、浜松・平山小、富士・田子浦小、島田・川根小、浜松・三ヶ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、浜松・有玉小
- 2015年度 裾野高、駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、静岡・清水三保第一小、浜松・平山小、富士・田子浦小、島田・川根小、東海大付属小、金谷高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中
- 2016年度 駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、富士・田子浦小、東海大静岡翔洋小、三島南高、静岡聖光学院中・高、浜松・可美中、裾野・富岡中、静岡・井宮小、富士宮・上井出小、森小
- 2017年度 東海大付属翔洋小、三島南高、静岡聖光学院中・高、浜松・可美中、裾野・富岡中、静岡・井宮小、富士宮・上井出小、森小、遠江総合高、静岡・観山中、本川根中、富士宮・西富士中、浜松・西都台小、静岡聴覚特別支援学校
- 2018年度 三島南高、静岡聖光学院中・高、富士宮・上井出小、静岡・井宮小、遠江総合高、富士宮・西富士中、静岡・観山中、本川根中、浜松・西都台小、静岡聴覚特別支援学校、清水西高、菊川西中、西伊豆・田子小、静岡・清水飯田小
- 2019年度 富士宮・西富士中、本川根中、静岡聴覚特別支援学校、清水西高、菊川西中、西伊豆・田子小、静岡・清水飯田小、浜松西高、常葉大附属橘高、小山中、伊豆の国・韮山南小、吉田・自彊小、湖西・白須賀小、浜松・城北小
- 2020年度 西伊豆・田子小、伊豆の国・韮山南小、静岡・清水飯田小、吉田・自彊小、浜松・城北小、湖西・白須賀小、三島・南中、小山中、静岡・大河内小中、掛川・桜が丘中、清水西高、常葉大学附属橘高、浜松西高、清水特別支援学校
- 2021年度 浜松・城北小、小山中、三島・南中、静岡・大河内小中、掛川・桜が丘中、清水特別支援学校、河津・南小、静岡・中島小、牧之原・萩間小、浜松・上島小、静岡大成中・高、浜松学芸中・高、御殿場南高、藤枝東高
- 2022年度 河津・南小、静岡・中島小、牧之原・萩間小、浜松・上島小、静岡大成中・高、浜松学芸中・高、御殿場南高、藤枝東高、伊豆・土肥小中、富士見中、静岡・清水飯田中、藤枝・広幡中、浜松・春野中、静岡北特別支援学校南の丘分校
- 2023年度 伊豆・土肥小中、富士見中、静岡・清水飯田中、藤枝・広幡中、浜松・春野中、静岡北特別支援学校南の丘分校、熱海・泉小、静岡・由比小、袋井・南小、浜松・初生小、静岡サレジオ中、浜松開誠館中・高、磐田北高、浜名高

静岡県N I E推進協議会

〒422-8033

静岡市駿河区登呂3丁目1番1号

(静岡新聞社内)

TEL 054-284-9152

FAX 054-284-9362

E-mail s-nie@shizushin.com